**ー初声・終声字の問題について考えるー**

**中期朝鮮語の再構音価を考える（その１）**

**2015.11.7**

目次

1. まえがき　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　　p1
2. 初声字１７字の制字　　　　　　　　　　　　　 　　　p2
3. 半舌軽音を考える　　　　　　　　　　　　　　 　　　p3
4. 唇軽音を考える　　　　 　　　　　　　　　　　　　　p6
5. 初声喉音字を考える　　　　　　 　　　　　　　　　　p11
6. 終声字を考える　　　　　　　　　　　　　　　 　　　p18
7. 半歯音字を考える　　　　　　　 　 　　　p23
8. 各自並書とㅭ（rʔ）との関係を考える　　　　　 p25
9. 激音を考える　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　p29
10. 合用並書表記を考える　　　　　　　　　　　　 　　　p33
11. s音添加の現象とは何か　　　　　　　　　　　 p36
12. 「間のs」を考える　　　　　　　　　　　　　　　　 p38
13. sもどきの音を考える　　　　　　　　　　　　　　　 p41
14. 喉頭化音（Cʔ）と有気音（Ch）の関係を考える　 　　　p44
15. 並書表記ㆅ（hh）の後裔であるᄻ（sh）を考える　　　　　　　 　p48
16. 各自並書について再考する　　　　　　　　　　 　　　p51

〔おわりに〕　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　p55

【注】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　　p55

【引用書】　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　p61

1. まえがき

去年は中国語上古・中古音について考えていましたが、そのために中期朝鮮語に関する本を数冊読みました。古代朝鮮語を知ることのできる資料は多くはなく朝鮮語の歴史を考察するためには中期朝鮮語を起点とするのが基本となっています。そして古代朝鮮語は『訓民正音』で規定されたところの中期朝鮮語をさかのぼることによって、また現代語はその中期朝鮮語からの変化を考えることによって古代から現在に至る朝鮮語の変化を知ることができると考えられています。
　　『訓民正音』はその御製序に「漢字の読み書きができない民は、言いたいことがあっても、その意をのべることのできない者が多い。私・世宗はこれを憐れに思い、新たに二十八字を作った」（趙　2010:8）とあるように「李氏朝鮮（一三九二〜一九一〇年、韓国では一般に朝鮮王朝と呼称する）の第四代国王である（、在位一四一八年～一四五〇年）」によって「一四四三年（陰暦）一二月に完成し、（一部略）一四四六年（陰暦）九月に「解例」の附された書籍『訓民正音』として世に頒布された」（ともに上書：192）ものです。この『訓民正音』（解例本）(注1)は御製序・例義・解例・鄭鱗趾序からなり、音節を初声・中声・終声に三分する、中国語音韻学（注2）にはみられない独自の分析がみられ、さらに用字例には声調をあらわす傍点（注3）の説明がみられます。「御製序」では文字創成の理由が、「例義」ではハングル各字とその運用法と傍点について、「鄭鱗趾序」には文字創製の背景やハングルの利点などが書かれています。「解例」は制字解・初声解・中声解・終声解・合字解・用字例からなっていて発明されたハングル字母についての詳しい説明がなされ、固有語による例が附されています。また陰陽五行に基づく音の分類と分析もなされている「制字解」ではハングルの制字原理が、初声解では音節初頭子音字母１７字、中声解では母音字母１１字、終声解では初声字を複用する音節末子音字母８字について、また合字解ではこれらの各字の組み合わせ方法などの説明が、用字例では具体的な文字の使用例として固有朝鮮語94語がみられます（詳しくは上書各項）。

ところで『訓民正音』（解例本）は「現代の言語学の観点から見ても驚くべき優れた音声学的観察と音韻論的考察を背景として作られた文字体系」（福井　2013:15）とみて間違いないでしょう。そこで『訓民正音』（解例本）の記述を丁寧に読み、現代音声学の知見とあわせみることで中期朝鮮語の音価を知ることができると考えられます。そしてその知見をもとに古代の郷歌などの解読が成功すれば古代朝鮮語の姿も目にみえてくることでしょう。そこで今回は『訓民正音』（解例本）の記述をより深く読むことで中期朝鮮語の音価について通説とはちがった新たな考えを紹介していきたいと思います。中期朝鮮語の音価についての考察が「日本語の起源」の解決に何の関係があるのかと言われそうですが、しかし回り道にみえてそうでないことはこれからもまだまだ更新するHPのなかでおいおいとわかっていただけると思います。なお中期朝鮮語について馴染みのうすい方は次の書籍を先に読んでいただくと、このあとの考察にたいする理解がやさしくなると思います。

１．『韓国語音韻史の探究』　福井玲著　三省堂　2013

２．『韓国語の歴史』　李基文著　藤本幸夫訳　大修館書店　1975

３．『韓国語変遷史』　金東昭著　栗田英二訳　明石書店　2003

４．『訓民正音』（東洋文庫800）　趙義成訳注　平凡社　2010

５．『ハングルの成立と歴史』　姜信沆著　梅田博之（日本語版協力）　大修館書店　1993

また中国語上古・中古音については下記の本が参考になるでしょう。

１．『中国文化叢書　1 言語』 牛島徳次・香坂順一・藤堂明保編　大修館書店　昭和42
２．『中国語音韻論―その歴史的研究―』　藤堂明保　光生館　1980
３．『古代の音韻と日本書紀の成立』　森博達　大修館書店　1991

1. 初声字１７字の制字

『訓民正音』（解例本）では音節を中国語のように声母（語頭子音）と韻母（語頭子音以外）に二分するのではなく、初声（語頭子音）・中声（母音）・終声（音節末子音）の三つに分析しています。そこでまずこの初声字の問題を考えることにします。

制字解において初声字の制字原理が説明されています。その方法は象形により基本字（ㄱ・ㄴ・ㅁ・ㅅ・ㅈ・ㅇ）を創字し、それらの基本字から息の「厲」（「はげしい・きびしい」の意）に基づき、一画（―）を加え新しく文字をつくること（「加画」）でさらなる字を創字しています。そしてこの象形と加画の原理、またそれにはずれる例外について次のような記述がみられます（趙　2010:28）。

「牙音字ㄱ（k）は、舌根が喉をふさぐ形をかたどっている。舌音字ㄴ（n）は、舌が上歯茎に付く形をかたどっている（以下、唇音字・歯音字・喉音字の記述は省略）。ㅋ（kh）はㄱに比べ音声がやや激しく出るので、画を加えた。ㄴ（n）からㄷ（t）、ㄷ（t）からㅌ（th）は（唇音字以下の記述も省略）、音声の激しさに基づいて画を加えるという意味でみな同じである。だが、唯一ㆁ（ŋ）だけは（牙音字なのにㄱ（k）に画を加えて作ったのではないので）別である。（以下、半舌音字ㄹ（r）と半歯音字ㅿ（z）の記述は省略）」

＊象形：「話者に向かって右側から見た声道の断面」（福井　2013:22）をまねたと見られます。＊ローマ字（翻字）は筆者が加えました。

このようにして作られた中期朝鮮語の初声字（音節頭子音）は通説では次のようになります（趙　2010:39）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 平音 | 激音 | 濃音 | 鼻音など | 中期朝鮮語 |
| 牙音 | 君ㄱk | 快ㅋkh | 虯ㄲkk | 業ㆁŋ | 軟口蓋音 |
| 舌音 | 斗ㄷt | 呑ㅌth | 覃ㄸtt | 那ㄴn | 歯茎音 |
| 唇音 | 彆ㅂp | 漂ㅍph | 歩ㅃpp | 弥ㅁm | 両唇音 |
| 歯音 | 即ㅈc | 侵ㅊch | 慈ㅉcc |  | 歯茎破擦音 |
| 戌ㅅs |  | 邪ㅆss |  | 歯茎摩擦音 |
| 喉音 | 挹ㆆ ʔ | 虚ㅎh | 洪ㆅhh | 欲ㅇ’ | 声門音 |
| 半舌音 |  |  |  | 閭ㄹr | 流音 |
| 半歯音 |  |  |  | 穣ㅿz | 有声歯茎摩擦音 |
|  | 全清 | 次清 | 全濁 | 不清不濁 | 中古中国語 |

＊趙氏の表をもとに中国語・朝鮮語音韻学と現代音声学の術語をつけ加えました。

1. 半舌軽音を考える

上表からわかるように中期朝鮮語のㄹ（r）は中古音来母字「閭」（l）によって定義されています。このㄹは「現代語と同様に音節末で[l]，またそれに後続する音節頭で[l]となる他は語頭語中において[r]であったと考えられる。このrの正確な音価は知りがたいが，おそらく現代語と同様に弾き音[ɾ]または語中ではときにふるえ音になることもあったものと推定され」（福井　2013:37）ています。また朝鮮漢字音の特徴として中国中古音の入声tに対応する音節末子音がㄹとなっていることです。

ところで『訓民正音』（解例本）の合字解で半舌音（ㄹ）だけでなくㄹとㅇを縦に連書した（注4）半舌軽音ᄛが次のように規定されています（趙　2010:100）。

「半舌音には軽重の二つの音があるが、中国の韻書（筆者注：原文「韻書」の訳）での音は一つしかない。また、わが国の言葉では軽重の区別がないが（筆者注：原文「且國語雖不分軽重」の訳）、いずれであっても音として成り立ちうる。もしもの場合に備えて用いようとするならば、唇軽音の例にならい、ㅇをㄹの下に連ねて書けば、半舌軽音を表す字となる。半舌軽音は舌がさっと上歯茎に付く音である」
　＊趙氏注：「この文字が実用に附された形跡はない」（上書:101）。

　ところで中国語中古音来母（通説はl）であると規定された中期朝鮮語のㄹ（通説はr）の音が何であれ現代音ㄹにはlとrの二つの音がみられます。そこで上の記述から「半舌重音は[l]、半舌軽音は[ɾ]と推測され」（上書:101）ています。

しかし上の「わが国の言葉では軽重の区別がない」との記述をすなおに読めば中期朝鮮語のㄹに2種の音（lとr）があったと考えることはできないでしょう。なぜならlとrの区別をもたない我々日本人なら[l]と[ɾ]の違いを知りその違いを述べることは難しいでしょう。しかし当時の中期朝鮮語話者がlとrの違いをもっていた（知っていた）のであればlとrのあいだにある音の違いにたいしてなぜ合字解のなかで注意書きをしなかったのでしょうか。また中古音来母字（l）に対応する中期朝鮮語が[l]であれ、[ɾ]であれㄹの一種しかなく、そのうえ半舌軽音ᄛはその当時使用された形跡がなかったのであればᄛはなかったと考えるのが自然ではないでしょうか。では中国の韻書には半舌音の来母（l）は１種しかなく、またそれに対応する中期朝鮮語のㄹも１種であったとするのであれば合字解の「半舌音には軽重の二つの音があり、（略）ㅇをㄹの下に連ねて書けば半舌軽音を表わす」という記述はどのように解釈すればよいでしょうか。そこでこの疑問を解くために「半舌音には軽重の二つの音があり」という記述は中期朝鮮語ではなく中国語中古音にたいする注意書きとみてみます。そして中国の韻書の来母はlただ一つ、しかし当時の中国語の口語においては半舌重音（韻書の来母l）と半舌軽音ᄛの2種の音がみられたと考えます。そして中古音来母（l）に対応する中期朝鮮語のㄹは現在に至るあいだに[l]と[ɾ]に分化したと考えると合字解の記述をうまく解釈できるでしょう。では[l]と[ɾ]に分化するまえの中期朝鮮語のㄹとはどんな音だったのでしょうか。合字解の記述をすなおに読むとでてくるこのような疑問はいまだ韓国語音韻学者のあいだにだされたことがありませんが、中国語音韻学者のあいだでは「上古漢語に複声母は存在するのか」という重要で難しい問題としてすでに提起されています。上古音にkl/glなどの複子音を考え、日本に借用された「樂」字が「」、また「」のようにk（見母）とr（来母lの日本借用音）で現れることや諧声符が同じである「」（見母k）と「」（来母l）などの変化を解くためにkl（gl）→k/rの変化を考える説を複声母説といいます。しかしこのあと引用する文中で尾崎氏が指摘されているように上古音に複声母kl（gl）を考えることには問題があります。
　尾崎氏の考えをみてみます（尾崎　昭和55:33-4）。

「大同、文水、平陽、蘭州の諸方言にその存在を觀察しているɫu（大同の「路」）のɫがもつ軟口蓋音性を、一層強めたものがいまのわれわれのこの音であると考えるならば、「洛」字の古音が、今韻を經ていまの標準漢語音につながる推移は、（改行）L->ɫ->l-（改行）と考える便宜もあるといえる。その場合大ざっぱにいってL>ɫ>lの道すじは、一つのLateralが、舌尖から奥舌面にまで及ぶ廣い調音を漸次縮小して、舌尖だけのLateralにいたるそれである、としてよいだろう。」

　このように「「各」の古音には今韻におけると同じk-を、「洛」のそれには今韻におけると同じl-、ただし強く軟口蓋音化されたl-（略）」（上書:33）を考えることによって、唐代以後の中古漢語「藍」のタイ語への移入と思われるタイ語K‘ram(<Gram)を中国語上古音glamに対応させるのではなく、中古音lam（日本借用音：「出の誉れ」）の「lの軟口蓋音性をまだ顕著にのこしていた時代の漢語の、タイ語音韻體系による「翻訳」であると考えられる」（同書38-9）とされました。つまり諧声符がおなじである「各」（中古音kak：見母鐸韻）と「洛」（中古音lak：来母鐸韻）への変化をkl→k（「各」）とkl→l（「洛」）と考えるのではなく（L）→k（「各」）と（L）→ɫ→l（「洛」）のような変化として説明されたのです。
　ところで上のɫは‘暗い（軟口蓋化した）l’といわれ、l‘明るいl’とは次のような違いがあります（小泉訳　1982:80）。

「舌の主体部の形状によって区別される2種の[l]がある（第20図e,f原注）。明るい[l]では，前舌部が硬口蓋へ向かって上がるので，舌の表面は凸型をなす。この[l]は[i]の音色をもつ。暗い（軟口蓋化した）[ɫ]では，後舌部が軟口蓋へ向かって上がるので，接触面のすぐ後にある舌面は凹型をなす。この[ɫ]は[u]の音色をもつ。訳注35）（以下、中略）音声環境によって両方の[l]が英語に現われる。例：little[litɫ]<小さな><母音の前では[l],語末や子音の後では[ɫ]がくる。例：lip[lip]<唇>，pill[piɫ]<丸薬>>。古典ラテン語も同じであったに違いない原注63）。暗い[ɫ]では，舌端がlの位置をとる一瞬前に後舌のuの構えがはいりこむ。そこで[u]が[l]の前に現われる。そして多く[l]は後になって落ちてしまう（以下、ドイツ語例は省略）。明るい[l]では，これに対する場合[i]が残る（ドイツ語例などの説明は省略）。芽ばえた母音がはっきりした形で聞かれ，しかも[ɫ]がまだ消えていない時代の音声状態はRenault,Arnault<人名>という綴りの中に写し出されている。（以下、省略）」

このようにlには‘暗い（軟口蓋化した）l’と‘明るいl’の2種があるので、上の尾崎氏のアイディアを借用して、来母の変化をX（上古の来母:尾崎氏のLに相当）>l（中古音来母）>ɫ（現代大同方言など）（注5）のように考えます。このような一部の来母lの前身をＸと考えることはにわかに賛成できないと疑念を持たれるかもしれません。しかし「敦煌写本守温韻學残巻跋」（南梁漢比丘守温述）にみえる「牙音　見君渓群來疑等字是也」（筆者注：君は群の書き損じとも、尾崎　昭和55：79）の記述からk（見母）とl（来母）を同一調音点の子音とみる中国語方言があったとみることは可能でしょう（注6）。そこでこの考えから合字解の記述は中国の韻書では半舌音来母（l）、しかし当時の口語では半舌重音（l）と半舌軽音（ɫ）があり（もし必要があればそれをᄅᅠᆼで書ける）、それに対して中期朝鮮語は来母lに対応するㄹ一つしかなかった（その後ㄹは現代にいたる過程でr/lに分化した）とうまく解釈できるでしょう。

1. 唇軽音を考える

唇軽音字について考えます。『訓民正音』（解例本）では唇音字は下表のように中古音唇音に対応するとされています（趙　2010:39，41）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| 中国中古音 |  | 全清 | 次清 | 全濁 | 不清不濁 |
| 唇音 | 幫（p） | 滂（ph） | 並（b） | 明（m） |
| 軽唇音 | 非（f） | 敷（fh） | 奉（v） | 微（ɱ） |
| 中期朝鮮語 | 唇重音 | ㅂ（p） | ㅍ（ph） | ㅃ（pp） | ㅁ（m） |
| 唇軽音 | ㅸ（β） | ㆄ | ㅹ（ppo） | ㅱ（W） |
|  | 平音 | 激音 | 濃音 | 鼻音 |

＊中期朝鮮語のㅸは有声両唇摩擦音（/β/）、中古音非母は無声唇歯摩擦音（/f/）と推定されています。
＊ㆄは使用されず翻字は特になし。「ㅹ：ᄬᅮ（父）－ppou」（小倉　昭和50：239）。

唇音字には唇重音と唇軽音の2種があり、制字解で「ㅇを唇音字（ㅂㅃㅍㅁ）の下に連ねて書いて唇軽音字（ㅸㅹㆄㅱ）とするのは唇軽音が軽い音で唇がさっと合わさり、喉の音声が多いからである」（趙　2010:41）と記述されています。「しかしながら、朝鮮語音として存在するのは、「ㅸ」によって表記される[β]のみである。残りの「ㅹ、ㆄ、ㅱ」は朝鮮語の表記には用いられず、原則的にもっぱら中国語音などの外国語音を表記する際に用いられ」（同書:40-1）ました。
　そこで体言と用言の語幹末子音に使用された唇軽音ㅸをみてみると次のようになっています（福井　2013:40）。

「/β/は語中で有声音間にしか現れない。体言における例は，例えば，taiβat</tai/「竹」+/pat/「畑」のように，複合語の後半部の名詞の頭子音pがβとなるものを表記した例が多いが，saβi「蝦」，tɨβɨi「瓠」(訓解用字例25a)のように必ずしもそうでないものもある。」

　また用言の語幹末子音にみられるpとβの違いは次のようになっています（同書：40）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | -ko | -(ɨ)mjen | -a/e |
| kuβ-「焼く」 | kupko | kuβɨmjen | kuβe |
| kup- 「曲がる」 | kupko | kupɨmjen | kupe |

＊ko：並列の接続語尾。(ɨ)mjen：条件語尾。a/e：連用語尾。

上にみられるtai+pat→taiβatやkup-とkuβ-の交代、また中古音の非母（唇歯摩擦音/f/）とㅸの対応、さらに現代韓国語の音節間では無声音ではなく有声音であることなどからㅸは無声唇歯摩擦音（/f/）ではなく、有声両唇摩擦音（/β/）と考えられています。そしてこのβは「15世紀のうちに摩擦性を失い，後続する母音を円唇母音化する要素/w/と変化した。（略）この音素は，訓民正音創制の時期がちょうど消滅し始める時期に当っていたと見ることができ，その後約25年間，文献によってあるいは語種によって出現に違いを見せる過渡期を経て，それ以降は消滅したものと考えられ」（上書:192）ています。

このように中世に消滅しはじめたとみられるㅸは12世紀初め、漢字によって音写された『鷄林類事』に次のようにみられます（前間　昭和49：210，245）。

「虎曰監蒲南切（改行）（一）ᄫᅥᆷ　　鮮初にはᄫᅥᆷとも、（二）범とも、（三）ᄋᅻᆷともいはれた、범、ᄋᅻᆷはᄫᅥᆷの轉化であろう。」

「酒曰酥孛（改行）수ᄫᅳᆯ　　酒は鮮初に（一）술、（二）술ᅌᅳᆯ、（三）술ᅌᅮᆯと話された。수ᅌᅮᆯがその一番舊い形で、これはみな수ᄫᅳᆯからの轉訛であり、高麗に수ᄫᅳᆯと話されたことがこの文で知られる。また三國史記にある角干（ᄲᅳᆯㅈ한、筆者注：ᄲᅳᆯのㅂはㅸの代用として）は酒多（수ᄫᅳᆯ한）であるといった物語も・・・（以下、略）」

そこで「虎」（現代語호랑이）や「酒」（現代語술）の例から범→ᄫᅥᆷ→ᄋᅻᆷ、수ᄫᅳᆯ→술ᅌᅮᆯ→술の変化を考えることができるでしょう。また吏讀などにみえるᄉᆞᆲは「此の「白」を「ᄉᆞᆲ」といふことは、此の字の訓によったもので、「奉する」・「申し上げる」の義ある動詞に當るものであるが、それが後世一轉して謙譲の助動詞に用ひられるに至ったもので」（小倉　昭和49：571）、ᅀᆞᆲ（ᄉᆞᆲ）からᅀᆞᆸ・ᄉᆞᆸ・ᄌᆞᆸ・ᄋᆞᆸ、またそれぞれのㅂはㅂ→ㅸ→w（와や오など）に変化しています（同書：574の表のまとめ）。このようなことから「βは一般的にwに変った。βa>wa,βə>wə,βʌ>wʌ>o,βɨ>wɨ>u。例。kɨrβar>kɨrwar（文）（数例略）。ただβiはwiまたはiに変った。chiβi>chiui(以下、略)」（李　1975：146）とみられています。そこでこのㅸの変化をp（ㅂ）→β（ㅸ）→w（와や오など）のように定式化しておきます。

ところで中期朝鮮語のㅸについては上のような変化が知られていてその音価はβ（有声両唇摩擦音/β/）とされるのですが、少々疑問があります。なぜならㅸについては『訓民正音』（解例本）制字解に「軽い音で唇がさっと合わさり、喉の音声が多いからである」（趙　2010:41）との記述があるのみで、『訓民正音』（諺解本）や『東国正韻』と同じく特別な注記はみられません。中国においては『中原音韻』（1324年）ころより「入声韻尾が弱まり，ある方言では声門閉鎖音となり，また他の方言では-ゼロ,-w,-jの三者に変化」（藤堂　1980：115）したとみられています。そして『訓民正音』（解例本）より70年ほど後の『四声通攷』の凡例（注7）にそれらの弱化した入声韻尾のひとつである「薬韻は唇軽音全清音（字）であるㅸ[f]で表わ」（姜　1993：225）すと記述されています。そこでこのㅸは全清音と記述されているので有声両唇摩擦音音（/β/）ではなく無声両唇摩擦音（/Φ/）と考えるほうが自然でしょう。また「『訓民正音解例』 saβi（エビ）」や15世紀初頭の『朝鮮館譯語』の「　酒必格以（\*saβi kəi）」（ともに李　1975：145）にㅸがみえます。そこで「y，rと母音の間で[b]>[β]の変化が十五世紀をあまり遡らない時期にあったものと推定」（同書：113）すれば「中世語saβi（エビ）、東南方言[sɛbi]」（同書:83）の対応をsabi→saβi（中世語）→sai’u（現代語새우）、またsabi→[sɛbi]（東南方言）のように説明することができるでしょう。しかしこの説明のためには中世以前にb（有声両唇閉鎖音/b/）があり『訓民正音』時代にはβ（/β/）になっていたと考える必要がありますが、そう簡単に考えてよいのでしょうか。『訓民正音』（解例本）の制字解で中期朝鮮語の各自並書（ppなど）は中古音全濁音（通説は有声音）に対応するものと規定されているので、もし中世のㅸが有声音であれば各自並書ㅹ（奉母相当）で記述されたのではないでしょうか。つまり全清音で規定されているㅸは通説のβ（有声両唇摩擦音）ではなくΦ（無声両唇摩擦音）であったとみるのが自然でしょう。このような素朴な疑問は大切にしなければなりません。そこでこの疑問を解くためにㅸと同じような変化が見られる日本語のハ行音の変化を考えることにします。

ハ行音の変化（通説）は次のようになっています（外山　昭和47：113-5,126-130,194-7）。

語頭（ハ行頭子音）の変化：pa/pi/pu/pe/po→Φa/Φi/Φu/Φe/Φo→ha/çi/Φu/he/ho

語中（ハ行転呼音）の変化：pa/pi/pu/pe/po→wa/wi/u/we/wo→wa/i/u/e/o

＊p：無声両唇閉鎖音（/p/）。Φ：無声両唇摩擦音（/Φ/）。h：無声声門摩擦音（/h/）。ç：無声硬口蓋摩擦音（/ç/）。V：母音（/V/）。w：半母音（/w/）。

上のようにハ行音の語頭と語中ではその変化が違っているので、語頭と語中のpは違っていたと考えるのがよいでしょう。そこで語頭と語中のpを同じと考える通説は破棄して、語頭の子音はp、語中の子音はPであったと考えることにします。まずハ行語頭のp（閉鎖音/p/）が直截にΦ（摩擦音/Φ/）に変化したと考えるよりはp→ΦのあいだにpΦ（破擦音/pΦ/）（小泉訳　1982：70　カイモグラフの図）（注8）を考えるのが自然でしょう。そこで語頭子音の変化をp→pΦ→H（H：Φ,h,ç）と定式化します。次に語中のハ行転呼音の例として「母」の変化を考えます。「母」は中世の日葡辞書に「Faua.ハワ（母）母親」「Fafa.l,faua.ハハ。または，ハワ（母）母」（土井　1980：213,196）とあることから当時ΦaΦaとΦauaの二つの音があったと考えることができます。そして現在の「母」は「[haɦa]」（ɦ：有声声門摩擦音/ɦ/、小泉訳　1982：96）と発音されるので、「母」の変化はpaPa（古代）→ΦaΦa/Φaua（中世）→haha/hawa→haɦa（現代）と考えられそうです。そして「ハワ」（hawa）が「ハハ」（haɦa）に回帰した変化を「同音反覆の語形成に対する記憶の伝承によって修復され」（亀井　昭和59：208）たためであるという考え方があります。しかしΦaがhaに変ることは音声的な変化として自然ですが、waがɦaに変化するのは少々無理があるでしょう。そしてこのような無理なwa→ɦaの変化を考えたとしても中世において語頭と語中で同じΦaになっていることや江戸時代のhahaがなぜ連濁して現代語のhaɦaに変わったのかその理由を説明することはできません。このような疑問にたいして何も答えることができない通説（papa→ΦaΦua→haɦa）は破棄すべきでしょう。

ではハ行転呼音はどのように変化したのでしょうか（注9）。この疑問に答えるためには音便の変化について考えるのが役にたちます。音便は「平安時代にはいって一般化したが、その中でもイ音便・ウ音便が古く、ついで撥音便・促音便の順で発達し」（中田　昭和47：28）ています。

例をあげておきます（イ・ウ音便の例は筆者，外山　昭和47：223，奥村　昭和47：130）。

イ音便：kaki（書き）+te（て）→kaite（書いて）。kopi→koi（恋）。amasi→amai（甘い）。

ウ音便：imo（妹）+pito（人）→imouto（「妹」）。kura（蔵）+pito（人）→kuraudo→kurando（蔵人）。

撥音便：「バ・マ行から撥音化したmとナ・ラ行から撥音化したnとが，表記上区別されていたことは『土左日記』などの表記から明らかであろう。」

促音便：「→ニフタ（和名抄）〜ニツタ（太平記）。

　　　　 →ヲフト（和名抄）〜ヲツト」（童蒙頌韻群書類従本）。

「母」の変化はpaPa→ΦaΦa/Φauaとみられるので語中（ハ行転呼音）の変化にはXpa→Paのような変化を起こす前接辞Xを考えます。このように前接辞Xを考えると語頭と語中の変化の違いをpa→Φa、Xpa→Pa→ua→ua（uはuの無声化音の代用）（ただし、ua→wa、ua→Φa）（橋本萬太郎　1981：214－5）のように説明できるでしょう。またハ行転呼を起こすPaは時代によってPi→i（イ音便）、Pi→u（ウ音便のち撥音便）、Pi→Q（促音便）のように変化しているので、それらの音便の変化を起こす原因をそれぞれx・y・zと考える（注10）とPxi→i（イ音便）、Pyi→u（ウ音便のち撥音便）、Pzi→Q（促音便）と考えることができるでしょう。そこでそれらの各音便を起こす原因であるx・y・zがPVに内在していると考え、その内在化をPVのように表わします。そこでまず上代（あるいはそれ以前）に原因xが発現して（ただしウ音便と促音便の原因であるy・zは未発現）イ音便が発生したと考えます。そしてその変化をPi→Pxi→iのように定式化します。またPiのxが消失したあとに原因yが発現して（ただし促音便の原因であるzは未発現）ウ音便が発生し、そのウ音便はのち撥音便となりました。その変化をPi→Pi→Pyi→u（→ɴ：撥音）のように定式化します。またその後Piの原因yが消失しPiとなり原因zが発現し促音便が発生したと考えます。その変化をPi→Pi→Q（Q：促音）のように定式化します。そこで各音便の時代差を考慮して語中のPiの変化を次のように考えることができるでしょう。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 音便の未発現 | イ音便の発現 | ウ音便・撥音便の発現 | 促音便の発現 |
| Pi--------→Pxi→Pi |  |
| Pi--------→Pi-----------→Pyi----→ | u（ウ音便）/ɴ（撥音便） |  |
| Pi--------→Pi-------------------------------------------------→Pi→Q（促音便） |

＊上の表ではウ音便（旧）と撥音便（新）の時代差を無視してPyi→u/ɴとしています。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 語例 | イ音便 | ウ音便（→撥音便） | 促音便 |
| 「恋」 | kopi | koi |  |  |
| 「妹」 | imopito-→ | ------→ | imouto→imo:to |  |
| 「夫」 | wopito--→ | ------→ | woputo-------------------------------→ | wotto→otto |
| 「病む」 | yamite--→ | ------→ | yaNde（病うで）--→yande（病んで） |  |
| 「蔵人」 | kurapito→ | ------→ | kuraNdo（くらうど）→kuraɴdo（くらんど） |  |
| 「買う」 | Kapi+te-→ | ------→ | kapute→kaute→ko:te（こーて）（関西方言） | katte（買って） （関東方言） |

＊右肩のはx・y・zの内在化（各音便の未発現）、またP xはxの顕在化（イ音便の発現）とy・zの内在化（未発現）を表わす。ウ音便・促音便も同様。
＊N：鼻音（/N/：m→n→ŋ）。ɴ：口蓋垂鼻音（/ɴ/：撥音「ん」）。
＊語例ではウ音便と撥音便の時代差を考慮してŋ→u（ウ音便）、ŋ（軟口蓋鼻音）→ɴ（口蓋垂鼻音）→ɴ（撥音便ン）のような変化を想定してあります。この問題は後の更新で詳しく考察します。

ここまでの考察からハ行頭子音（語頭）とハ行転呼音（語中）の変化を次のように定式化します。

1.ハ行頭子音の変化：p→pΦ→H
＊H：Φ（フ）,ç（ヒ）,h（それ以外）。

2.ハ行転呼音の変化：P→Px→Py

＊「母」の変化：pa Pa→pΦa Pxa（上代）→ΦaɴPYa（=Φaua：キリシタン文献faua）→Φa〜Pa（=Φa〜ua：キリシタン文献fafa）→ha〜ha→haɦa（連濁：江戸時代以降）。

＊x・y・z：それぞれイ音便・ウ音便（撥音便）・促音便を起こす原因（またその発現）。：x・y・zの内在化（またその未発現）。
＊頭子音はp、転呼音はP（=ɴp）。2音節語はɴpVɴpV→pVPV。

＊p：両唇閉鎖音/p/。pΦ：両唇破擦音/pΦ/。Φ：両唇摩擦音/Φ/。ç：無声硬口蓋摩擦音/ç/。h：無声声門摩擦音/h/。ɦ：有声声門摩擦音/ɦ/。V：母音/V/。

＊N（鼻音）の変化：ŋ（軟口蓋垂鼻音/ŋ/）→ɴ（口蓋垂鼻音/ɴ/）→〜（鼻母音）。

このようにハ行音の変化を考えることができるのですが、この変化は朝鮮語のㅸの変化と似ています。そこでㅸは古代でも中世でも有声化していなかった（/β/ではなく/Φ/）と考えると、ではㅸが全濁奉母（各自並書ppo）で規定されなかった事情をうまく説明できるでしょう。

1. 初声喉音字を考える

初声喉音字の問題を考えます。中期朝鮮語の喉音ㅇ（ ’）は「欲」字（中古音喩母4等）で規定されています(趙　2010：17)。このㅇはø（zero子音）とみられています（福井　2013:11）が、用言語幹に付く接辞，語尾の一部は次のようにɣ（通説）として現れます（同書:41）。

「用言語幹に付く接辞，語尾のうちで，-ko,-kenɨr,-keiのように軟口蓋閉鎖音ではじまるものは，例えば語幹末にrをもつ用言に付くと，次のようになる。（以下、略）」

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | -ko | -kenɨr | -kei |
| ar-「知る」 | arɣo | arɣenɨr | arɣei |
| ka-　「行く」 | kako | kakenɨr | kakei |

そしてㅇ（ ’）に対しては「もし本当に何も子音がないと，語幹末子音ｒは，次の音節の初頭子音となって，aro，arenɨr，areiなどと表記された」（上書同ページ）と考えられます。また『高麗詞之事』（16世紀末）に「「歌ヲ謡ヘ」にあたる韓国語として，「ドロカエブルラ」とあり，この「ドロカエ」は，\*norkaiという語形を写したものと考えられ」（同書同ページ）、中央方言では「名詞の例でいうと，15～16世紀には놀애（norɣai）「歌」であったものが，17世紀以降の文献では도래（norai）または놀래（norrai）として出現」（同書:193）しています。そこで南部朝鮮語をうつしたとみられる「ドロカエ」の「カ」がx（無声軟口蓋摩擦音/x/）であったと考えるとnorxai(16世紀ころの南部朝鮮語)→norɣai（ɣ：有声軟口蓋摩擦音）→nor’ai(15-6世紀놀애)→norai(17世紀도래)のような変化を想定することができ、ɣは「16世紀に変化が起こって，有声摩擦音素としては消滅したと考え」（上書同ページ）ることができそうです。しかしここで疑問が起こります。たしかにnor’aiに変化する前の音をnorɣaiと想定すればɣはその後消失したことになるのですが、『高麗詞之事』（16世紀末）「「歌ヲ謡ヘ」に記載された「ドロカエ」の「カ」は清音であり「ドロガエ」ではありません。そこでnorxaiがnor’aiに変化したと考えることはできるとしてもnorɣaiがnor’aiに変化したと考えることには問題があるでしょう。norɣai→nor’aiのような変化が起こったかどうかは問われるべき問題なのにɣの存在を仮定し、そこからɣの消滅を云々するのは本末転倒ではないでしょうか。

ここで上の問題を考えるために牙音字の制字について考えることにします。制字解では制字の出発点となる「ㄱㄴㅁㅅㅇの五つの基本字母については「象形」、その他の字母については「加画」という原理を用い」（趙　2010:29）ると説明されています。その加画の原則は平音（中古音の全淸）→濃音（全濁）、また鼻音（不淸不濁）→平音（全淸）→激音（次淸）のようになっています。そして加画の原則からはずれる制字や並書字の特殊性については次のような記述があります（同書:35-6）。

「ㄱ（k：以下の翻字は筆者）、ㄷ（t）、ㅂ（p）、ㅈ（c）、ㅅ（s）、ㆆ（ʔ）は全清である。ㅋ（kh）、ㅌ（th）、ㅍ（ph）、ㅊ（ch）、ㅎ（h）は次清である。ㄲ（kk）、ㄸ（tt）、ㅃ（pp）、ㅉ（cc）、ㅆ（ss）、ㆅ（hh）は全濁である。ㆁ（ŋ）、ㄴ（n）、ㅁ（m）、ㅇ（’）、ㄹ（r）、ㅿ（z）は不清不濁である。ㄴ、ㅁ、ㅇは音声が最も激しくないので、提示の順次が後ろであるとはいえ、形を象徴し、字を作る上でこれを出発点とした。ㅅ（s）とㅈ（c）はともに全清であるが、ㅅはㅈに比べ音声が激しくないので、これまた文字作りの出発点とした。唯一、牙音のㆁ（ŋ）は舌根が喉をふさいで音声と気息が鼻から出るけれども、その音声がㅇ（’）と似かよっているために、中国の韻書では「疑」の頭子音（[ŋ]）と「喩」の頭子音（[j]）を多くは混同して用いている。ここでもまた同じように、形を喉音字「ㅇ」（’）から作り、牙音字「ㄱ」（k）を文字作りの出発点としなかった。（以下、ㆁがㅇと似ている理由を五行から説明している部分は省略）。」

上の記述からわかるように制字の出発点は不清不濁字（ㄴ・ㅁ・ㅇなど）ですが、牙音字のㆁは喉音字の「ㅇに似ている」という理由からㆁ（ŋ）をㅇ（’）の別体と位置づけ制字の出発点とはされていません。ここで疑問になることがあります。鼻音（ŋ,n,m）は「肺臓からの呼氣に對し,持續部において口むろの調音器官が閉鎖を形成すると同時に,口蓋帆が垂れ下って鼻むろを通し呼氣が流れ出す音」（服部　1951：153）で閉鎖音（k,t,p）との違いは呼気が鼻に抜けるか抜けないかの違いです。そうであるなら「牙音字ㄱは、舌根が喉をふさぐ形をかたどっている」（趙　2010:28）と規定されたㄱを舌音字の基本形ㄴ（n）と同じように制字の基本形とすることができると思われます。つまりㅇを基本とせずに舌音字と同じように象形のㄱを制字の出発点としてㄱ（仮に翻字をすればŋ 、以下同じ）→コ（k）→∃（kh）/コ（k）→ｺｺ（kk）のような制字が可能だったのではないでしょうか。

この奇抜なアイディアをよくわかるように牙音字と舌音字の制字を比較すると、次のようになるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 象形 | 加画 |
| 基本形 | 激音へ | 濃音へ |
| 牙音字 | 制字解 | ㅇ（’ ） | ㅇ（’ ）→ㄱ（k）→ㅋ（kh） | ㄱ（k）→ㄲ（kk） |
| 筆者の仮定 | ㄱ（ŋ ） | ㄱ（ŋ）→コ（k）→∃（kh） | コ（k）→ｺｺ（kk） |
| 舌音字 | ㄴ（n） | ㄴ（n）→ㄷ（t）→ㅌ（th） | ㄷ（t）→ㄸ（tt） |

上表からわかるように制字の基本形をㄱ（ŋ ）としても牙音字の制字は原理的に可能だったにもかかわらずㅇとㆁが似ているとして、ㄱ（ŋ ）が排除されㅇが基本とされています。では牙音字の制字はなぜㅇが基本とされ、「唯一ㆁだけは（牙音字なのにㄱに画を加えて作ったのではないので）別である」（上書同ページ）とㅇの別体とされたのでしょうか。このような疑問はいままで朝鮮語学者からだされたことはありませんが考えるべき問題でしょう。

ところで語中の音節頭では「音楽」は京都方言などでoŋŋaku（共通語でこの頃はoɴgaku）のようにŋ音がみられますが、日本語では語頭がŋで始まる語はありません。また世界中の言語をみても音節末（終声字に対応）や語中の音節頭にŋは多くみられますが、語頭（初声字に対応）のŋはチベット語のŋa（「私」：中古音疑母歌韻上声ŋaと同源とみられます）など少数の言語にだけみられます。このように語頭で鼻音m・nがみられてもŋがほとんどみられないのは中期朝鮮語だけの音声的特徴ではなく、人間の言語音自体に内在するもっと音声的な（生理学的な）理由によると考えてよいでしょう。そこで中期朝鮮語の語頭にもŋがなく、またお手本とすべき中国中古音においてもŋ（疑母）は消失していたため（注11）牙音字の制字の出発点としてㆁは選ばれなかったのでしょうか。

さてここまでみてきたように初声字ㆁは少し特殊な存在であり、「ㅇとㆁが似ている」という中期朝鮮語の音声的事実から初声字ㆁは喉音字ㅇの別体として規定され（上書：28）、終声解では「ㅇは音声が淡くてろなので、必ずしも終声に用いる必要はなく、中声で終らせても音節をなすことができる」（同書：83）と規定されています。そこでこれらの規定からㅇをø（ゼロ子音）、ㆁをŋと考えると「ㅇとㆁが似ている」という記述と矛盾します。また例義においてㆆは「なり。挹字の初発声のし」（趙　2010:17）の記述が見られることからその音価は ʔ（/ʔ/：声門閉鎖音）とみられます。そこで当時の中古音の影母（ ʔ）に対応するㆆと喩母（j）（注12）に対応するㅇをそれぞれ　ʔ（声門閉鎖音）とj/ɦ（有声硬口蓋摩擦音/j/、有声声門摩擦音/ɦ/）と考えると、終声解の「喉音のㅇとㆆについて、その緩急が互いに対になっている」（同書：84）や合字解の「初声のㆆはㅇと似かよっており、朝鮮語においてはㅇで通用させることができる」（同書：100）との記述をうまく解釈できません。このようにㅇ・ㆆ・ㆁをそれぞれ ’（øやj・ɦなど）・ʔ・ŋと考えるこれまでの通説ではㅇとㆁのあいだに存在した微妙な音の違いやㅇとㆆのあいだに存在した緩急の対立といった大きな音の違いをうまく解釈できません。そこでㅇを ’やj・ɦなどと考える通説は破棄し、「ㅇは音声が淡くてろで、ㅇとㆁが似ていて」、なおかつ「ㆆはㅇと似かよっている」との記述をうまく説明できるㅇをさがすことにします。

喉音字ㅇは中古音喩母と規定されていることからø（zero子音など）とみられています。しかし用言語幹に付く接辞や「ドロカエブルラ」で考えたようにこのㅇは単なるzero子音（ø）ではなく、ある種の子音であると考えられます。ㅇは制字解で「不清不濁の喉音と積極的に規定されており，これは音声的にはいわゆる‘gradual beginning’1（注13）」（福井　2013:39-40）とみる考え方があり、「声立て」には‘gradual beginning’（ゆるやかな聲立て）と‘clear beginning’（はっきりした聲立て）があるとされます。そしてこの「声立て」の違いは「兩者ともに強めが母音において始まるが，その入りわたりが強められると，前者においては母音の前に[h]を生じ，後者においては[ʔ]が生ずる」（服部　1951：28）と考えられています。そこで‘はっきりした声立て’を ʔ（/ʔ/）、‘ゆるやかな声立て’を h（/h/）と考え、‘はっきりした声立て’から‘ゆるやかな声立て’への変化をㆆ（/ʔ/）→ㅇ（/h/）のように考えます。すると合字解で「初声のㆆはㅇと似かよっており」とされた記述は声立ての観点から‘はっきりした声立て’と‘ゆるやかな声立て’との対立とその消失（ʔ→h→ø）を‘ㆆとㅇとの似かより’と表現したものと考えられます。またㅇをɴ（口蓋垂鼻音/ɴ/：撥音の「ん」）と考えるとㆆ（ ʔ：無声子音）とㅇ（ɴ：不清不濁の鼻音）の対立は終声解の「緩急」の記述とうまく合うでしょう。そこでㅇがɴであり、かつ‘ゆるやかな声立て’であるという規定をみたすためにŋ（ㆁ）→ɴ（ㅇ）→’（ø）のような変化を考えます。すると合字解のㅇは「淡くて虚ろ」（=ø）で「ㅇとㆁが似ている」（ŋ≑ɴ）という記述をうまく解釈できるでしょう。また「ㆆは朝鮮語においてはㅇで通用させることができる」という記述はㆆの声門閉鎖音が消失し‘はっきりした声立て’ （ʔ）から‘ゆるやかな声立て’（ɴ→ø）への変化が終わっていたため（ㆆ→ㅇ）と解釈できるでしょう。
　説明が少しややこしくなったので、次にまとめておきます。

1.制字解の「ㆁはㅇと似かよっていて、喉音字ㅇの別体」の記述：
ㆁはŋ（軟口蓋鼻音）、ㅇはɴ（口蓋垂鼻音）で、その変化はㆁ→ㅇ→ø（消失）。

2.合字解の「ㅇは音声が淡くて虚ろ」と終声解の「ㆆとㅇが似ていて通用できる」の記述：
ㆆはʔ（‘はっきりした声立て’）、ㅇは’（‘ゆるやかな声立て’）で、声立ての変化はㆆ→ㅇ。

3.終声解の「緩」「急」の対立の記述：
ㆆは ʔ（無声子音）、ㅇはɴ（口蓋垂鼻音）で、その対立はㆆとㅇ。

　上のように考えると『訓民正音』（解例本）の記述をうまく解釈できるでしょう。
　ところでㆆ（ʔ）は固有語を表記するために次のように使用されています（同書同ページ：一部略）。

１．動名詞語尾の表記に：「horʔ kəs（「すべきこと」）」
２a．名詞語尾に添加（形式は１に同じ）：「hanarʔ ptɨｔ（「天心」）」（『龍飛御天歌』）

２b．「間のs」（sa・i・si・os）の代りに：「先考 ʔ ptɨt（「先行」の意）」（『龍飛御天歌』）

　＊２a．の例は小倉（昭和50：258）より追加（原載は前間　昭和49：28）。

このように使用された喉音ㆆ（ʔ）は「初声中でただㆆ（ʔ）だけが『訓民正音解例』用字例から除外され（一部略）、『東国正韻』の漢字音表記のために設けられ」（李　1975：133）たと考えられています。たとえば「‘워ᇙ月ᅙᅵᆫ印쳔千가ᇰ江지之콕曲’」（金東昭　2003：122）の「ᅙᅵᆫ」（印）や「ᅙᅡᆨ（惡）－ʔak[ak]」（小倉　昭和50：128）など語頭の漢字音表記にみられます。
　また合字解に次のような記述が見られます（趙　2010:95）。

「漢語と朝鮮語とを混用する場合、漢字の音によっては中声や終声を添えて書くものがある。例えば、「孔子ㅣ魯ㅅ:사ᄅᆞᆷ」（孔子ガノヒト）のような場合である」。

上の記述はㅣ（i）やㅅ（属格s）の字が「一つの音節をなさず、直前の漢字と合わせて一つの音節を成」（上書:96）していて、「「子ㅣ」の場合、これを[dzə-i]（ザ・イ）のように二音節で発音したのではなく、[dzəi]（ザィ）と全体で一音節で発音した。同様に「魯ㅅ」は[no-s]（ノ・ス）のように二音節で発音したのではなく、[nos]（ノス）全体を一音節として発音した」（上書同ページ）とみられます。
　このㅣ（i）の付加は名詞語幹の末音が子音と母音とで、次のような違いがみられます（姜　1993:146）。

1.子音の下では이（’i）が連綴して：사ᄅᆞᆷ（sarʌm「人」）+이（’i）→사라미（sarami）

2.母音の下ではㅣ（i）と連綴して重母音に、またはゼロ（ø）。
공ᄌᆞ（ko’dzə：孔子）ㅣ→공ᄌᆡ（ko’dzəi）
소（so：「牛」）+ㅣ（i）→쇠（soi）
소리（sori：「声」）+ø→소리（sori）
　＊ただし、ㅣ（i）やゼロ（ø）の添加は通説。이（’i）：主格曲用語尾。

上の規則からCV+이（CV’i）→CVㅣ（CVi）→Cv（合成母音化）の変化が想定できます。つまり이（’i）を‘ゆるやかな声立て’ではじまるiとみると、CV’iの声立てが消失してCViになり、その後Cvへの合成母音化を起こしたと考えることができるでしょう。また先に‘はっきりした声立て’をㆆ（ ʔ）、‘ゆるやかな声立て’をㅇ（ ’）、またそれらにㆆ→ㅇの変化を考えたので、中古質韻の「一」はᅙᅵᇙ（ʔiｒʔ）→일（’iｒ）のような変化を想定でき、iの声立ての変化を ʔi（ᅙᅵ）→’i（이）→i（ㅣ）のように定式化できるでしょう。そこで『龍飛御天歌』にでてくる「孝道 hʌrʔ ’atʌr」（「孝道する子供」の義、前間　昭和49：140）は「a-dɐr[a-dúl]の如く母音を以て始まる語も[ʔa-dúl]の如く喉頭破裂音を以て發音されたものと考へ」（小倉　昭和50：258）（注14）ることができるでしょう。

ここで先に考察した『高麗詞之事』（16世紀末）にみえる「ドロカエ」（「歌」）の変化についてもう一度考えてみます。まえに15～16世紀の놀애（norɣai）は「17世紀以降の文献では노래（norai）または놀래（norrai）として出現」（福井　2013:193）したことを紹介しましたが、놀애（nor’ai）→노래（norai）の変化は‘ゆるやかな声立て’が消失しnoraiになり、その後aiが合成母音化してnorɛ（現代音）になったと考えることができるでしょう。しかしもう一つの놀애（nor’ai）→놀래（norrai）の不思議な変化はなぜ起こったのでしょうか。このnor’ai→norraiの変化は「用言活用形の中で15世紀に…rɣ-という語幹末子音をもつものが…rr-と変化し，現代語のいわゆる르変則用言となっているものと同じパターンを示」（上書：同ページ）しています。

そこでこのrɣからrrへの不思議な変化を解くためにmorai（「砂」）について考えます。たとえば郷歌に「「沙矣」（「沙」中世語morɣai）―怨歌」（同書:188）（注15）とあり、この「沙」の後裔は「多くの方言において，[molgɛ]のようにkが弱化していない形が残存」（同書:188）し、また済州島方言でも「morai（沙）名morrai全域mosal全域」（翻字は筆者：玄　1962:434）のような語がみられます。また『朝鮮館訳語』（14世紀末）に「「省諭　阿貴」（ar’oi- 知らす）」（李　1975：149）とみえ、ar’oi-の ’oiが「貴」（見母微韻去声）に対応しているのでkoi（「貴」）→’oiの変化を認めることができるでしょう。さて中世の「ドロカエ」（「歌」）の変化に戻って考えます。通説では놀애（nor’ai）がそれ以前にnorɣaiであったことを想定し、その後その子音ɣが弱化し消失した（ɣ→ø）と考え、現代語노래（norai）への変化を導きだしています。しかし놀애（nor’ai）以前の音がnorɣai（ɣ：有声音）であったという証拠はどこにもなく、놀애（nor’ai）から現代語の놀래（norrai）への変化も説明することができません。そこでこのような存在するかどうかもわからないɣを仮定したうえで現代各方言形への変化を説明する通説は廃棄するべきでしょう。そうではなく『龍飛御天歌』（1445年）にみえる놀애（nor’ai、前間　昭和49：67）のㅇ（’）をkもどきの***k***から変化した音であると想定するとnor***k***ai→nor’ai（놀애）、また***k***→rの変化を想定（第3節の上古複子音説kl→k/lを破棄し、X→k/lから）するとnor***k***ai→norrai（놀래）の変化をうまく説明できるでしょう。つまりㅇ（’）をkもどきの***k***を無声軟口蓋系の音と考えるとr***k***→rk→rx（摩擦音化）→rɣ（有声音化）、r***k***→r’（ゆるやかな声立て化）、r***k***→rr（側面音化）のような変化を考えることが可能となり、有声子音ɣ（ㅇ）の弱化、その後の消失といったありそうもない変化を考える必要もなくなるでしょう。またこの考えを中世の「沙矣」（mor***k***ai）にも援用するとmor***k***ai→mor’ai→[molɛ]、そしてkもどきの***k***からr（中古音lに対応するもの）の変化を認めてmor***k***ai→morrai→[mollɛ]の変化やmor***k***ai→morkai→morgai→[molgɛ]の変化を考えることができるでしょう。

1. 終声字を考える

終声字（音節末子音）について考えます。終声は終声解で次のように定義されています（趙　2010:81）。

「[38] 終声は、初声・中声を受けて字韻をなす。「即」字の終声はㄱ（k）だが、ㄱ（k）が즈（cɨ）の終わりにあって즉（cɨk）となる。（以下、省略）（改行）
　[39] 音声には緩急の区別があるので、・・はその終声がのように詰まって速い音ではない。（略）ㆁㄴㅁㅇㄹㅿの六字は平声・上声・去声の終声で、残りはみな入声の終声なのである。しかしながら、終声字はㄱㆁㄷㄴㅂㅁㅅㄹの八字母で十分に事足りる。例えば、ᄇᆡᆺ곶「梨の花」、ᅌᅧᇫᅌᆜ갗「の皮」は、ㅅ（s）の字で通用させることができるので、ㅅの字だけを用いる」
　＊傍点は省略。翻字は筆者。

　上の[39]後半の語例にみえる表記法の違いは次のようにみることができるでしょう（福井　2013：27）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 「梨-属格（の）-花」 | 「狐-属格（の）-皮」 |  |
| a | ᄇᆡᆺ곶pai-s koc | ᅌᅧᇫᅌᆜ갗jezɣ－ɨi kach | 形態音韻論的表記 |
| b | ᄇᆡᆺ곳pai-s kos | ᅌᅧᆺᅌᆜ갓jes’-ɨi kas | 音素論的表記 |

ここで『鷄林類事』（12世紀初頭）と『朝鮮館訳語』（15世紀初頭）にみえる入声表記をみておきます（李　1975:108,153）。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 『鷄林類事』（宋の孫穆著） |
| k | 蛋曰批勒 pyəruk | 射曰活索 hwar so-矢射る | 尺曰作 cah |
| t |  | 笠曰蓋音渇 kat | 猪曰突 toth |
| 火曰孛 pɨr | 馬曰末 mʌr |  |
| 梳曰苾音必 pis | 花曰骨 koc |  |
| p | 七曰一急 nirkup | 口曰邑 ip |  |

|  |  |
| --- | --- |
|  | 『朝鮮館訳語』 |
| t | 　把 pat | 陽　別 pyət |
| r | 月　得二（tʌr） | 星　別二（pyər） |
| s | 花　果思（kos） | 城　雑思（cas） |

＊k：喉内入声字。t：舌内入声字。p：唇内入声字。s:無声歯茎摩擦音（/s/）。h:無声声門摩擦音（/h/）。

上の『鷄林類事』と同じように中世語では「mot（H　釘）－mos（H　池）」の対立がみられ、「現代語と同じ7つの音節末子音に加えて/s/も音節末に立つことができ」（ともに福井　2013：42）たとみられています。そしてまた「nunccʌzʌ,nuntcʌzʌ,nunscʌzʌ「瞳（<nun目+s+cʌzʌ核）」」（同書：68）のような表記がみられることから語末子音（終声）にs/c/tがあったとみることができます。

ところで入声（音節末子音）の緩急については次のような記述がみられます（趙　2010:84）。

「牙のㆁはㄱと対をなしており、ㆁを詰まって発声すればㄱに変化して急な音になり，ㄱをゆっくり発音ればㆁに変化して緩やかな音になる。舌音のㄴとㄷ、唇音のㅁとㅂ、歯音のㅿとㅅ、喉音のㅇとㆆについて、その緩急が互いに対になっていることも、また同様である。」

上の記述をまとめると次のようになります。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 牙 | 舌（半舌） | 唇 | 歯 | 喉 |
| 緩 | 平上去声 | 不清不濁之字（不厲） | ㆁŋ | ㄴn（ㄹr） | ㅁm | ㅿz | ㅇ ’ |
| 急 | 入声 | 全清次清全濁之字（厲） | ㄱk | ㄷt | ㅂp | ㅅs | ㆆ ʔ |

＊「「緩（=舒出）」が概して鼻音、「急（=促呼）」が概して閉鎖音の終声である。」（上書:85）。

＊下記の記述を勘案し、筆者が「緩」にㄹ（r）を入れました。

また朝鮮漢字音の入声については終声解で、「半舌音のㄹは、朝鮮語に用いるべきであって、漢語に用いるべきでない。（略）もしㄹを「彆」の終声に用いれば、その声が緩やかな音になり、入声にならない」（同書:86）との記述があります。また『訓民正音』（解例本）の一年後に完成した『東国正韻序』（1447年）においては「質・勿のような入声の韻は影母（ㆆ）をもって来母（ㄹ）を補（略）」（同書:182）い、入声tはㅭ（rʔ）のように表記するべきと規定が変わっています。そこでこの入声のtからrʔへの表記変更を「15世紀の韓国漢字音では，-tの入声音がすべて-lで発音されていたから，-tと-lを折衷してㆆ[ʔ]音を利用してㄹ[l]音の弛緩性を補おうとした試み」（姜　1993：203）であったとする考えがみられます。このような考えは「明の韻書である『洪武正韻』（1375年）にハングルで漢字音を付けて1455年（端宗3年）に出版」（金東昭　2003：122－3）された『洪武正韻譯訓』による当時の入声tの状態を解釈した金氏の記述のなかにも見られます（同書：147）。

「‘質’字の当時の南方音は‘・짇’であり、その北方音は‘・지ᇹ’と表記されていたのだが、その頃朝鮮の伝統漢字音は『六祖法寶壇經（諺解）』（1496年）によれば今と同じ‘・질’であった。この中国漢字音‘・짇/・지ᇹ’と朝鮮漢字音‘・질’間の差異を縮める折衷式の統一音として『東國正韻』では‘・지ᇙ’を書いているのである。」

　上の記述をまとめると次のようになるでしょう。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 『東国正韻序』 | 『洪武正韻譯訓』 | 『六祖』 |
| 「質」 | 지ᇙ（cirʔ） | 짇(南方音:cit)/지ᇹ(北方音:ciʔ) | 질（cir） |

＊『六祖』：『六祖法寶壇經（諺解）』。声調（傍点）は省略。
＊「北方音では入声韻尾は唐、五代に弱化し始め、14世紀に声門閉鎖音（ʔ）になった」（李　1975：108）。北宋のはじめ「-t,-kは合流して-ʔに弱（略）」（平山　昭和42：166）まったとみられています。

上表の『洪武正韻譯訓』の北方入声音지ᇹ(:ciʔ)によって中古音入声質韻は「急」なる音質を特徴とする声門閉鎖音（/ʔ/）をもっていたことが知られます。しかしそれでも当時の朝鮮の学者は『訓民正音』（解例本）では舌内入声をtと規定し、『東国正韻序』にいたってようやく「影母（ㆆ）をもって来母（ㄹ）を補」（同書:182）って지ᇙ（cirʔ）へと表記を変更しています。そこでこの表記の変更は「-tと-lを折衷して…云々」（趙　2010:86－7、182－3の趙氏の注）と説明されるのですが、当時の朝鮮の学者は韻書にとらわれ現実の北方入声音지ᇹをみなかった、というよりはその発音を聞いて知っていたけれどもその事実を大事にしなかったと考えるほうが実態に近いというべきでしょう。

ところで終声についてはまだ考えることがあります。終声解では終声の喉音字ㅇについて「ㅇは音声が淡くてろなので、必ずしも終声に用いる必要はなく、中声で終わらせても音節をなすことができる」（趙　2010:83）としています。この「淡くて虚ろ」という規定はㅇをɴ（口蓋垂鼻音）から ’（‘ゆるやかな声立て’）へ、またその後のø（消失）への変化を考えることで解決してきたのですが、『東国正韻序』ではさらにㅱ[W]とㅇ[zero]を終声に添加するように次のように規定しています（姜　1993:99）。

「中古音の/-aw/（効摂）と/əw/（流摂）は，韓国漢字音で各々/-o/と/-u/に変化して，韻尾の/w/が主音に吸収されたのに，『東国正韻』では韻尾（終声）として，-w系字音の終りにㅱ[w]字を表記した。そして-zero系と-j系字音の終りにはㅇ[zero]字を付け加えた。」

そこで「快」・「高」字によって上の規定をみてみると次のようになるでしょう。（同書同ページ）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 中古音 | 朝鮮漢字音 | 初声 | 中声 | 終声 |
| 快（蟹摂夬韻：灰韻去声khuai） | 쾡khoai’ | ㅋkh | ㅗw | ㅏa | ㅣj | ㅇ’ |
| 高（効摂豪韻kau） | 고ᇢkoW | ㄱk | ㅗo | ㅱW |

先にみた『洪武正韻譯訓』では入声tは짇(南方音:cit)と지ᇹ(北方音:ciʔ)とされています。しかし「漢字音の入聲がすべてㆆによつてあらはされたといふのではなく, ㆆ以外ㅸによつても書きあらはされたことで」（小倉　昭和50:267）す。入声薬韻（中古音iak）は『四聲通解』（1517年）凡例中に「通攷於諸韻入聲則皆加影母（ʔ）爲字，唯薬韻則其呼似乎効韻之音，故蒙韻加ㅸ爲字，通攷加ㅸ爲字，今亦從通攷加ㅸ爲字」（上に付加されたㅇ点は全て省略、同書同ページ）とあります。つまり入声薬韻（影母3・4等 ʔiak）は入声tに付加された ʔとは違ってㅸ字が付加されていることから何らかの特色があったとみられます。ところで「等」の違う「悪」字（影母1等 ʔak：鐸韻）については「いわゆる四十九根本字梵字aḥ音節に對して佛教者の充てる漢字が、阿(筆者注：影母1等 ʔa：歌韻）などと並んで玄應、不空などで惡の字であることを想い起こしてもいい」（尾崎　昭和55：132）という観察があります。これは唐代7世紀なかば頃にはサンスクリットのa（अ、現代ヒンディー音/ə/）とは別の音とされているaḥ（अः）を「阿」（歌韻a）だけでなく鐸韻の「惡」（ʔak）を用いて訳した事実を述べたものです。このようにサンスクリットのaḥを「阿」(ʔa）または「惡」（ʔak）で写していることからこの「惡」（鐸韻1等、3等は薬韻）は ʔak（外破）から ʔak（内破）を経て ʔahの状態（注16）に変化していたとみることができるでしょう。この「惡」の使用は「惡」の語末とサンスクリットaḥ（अः）の語末の状態がよく似ていたたためとみることができるでしょう。つまり「惡」の語末が単なるaではなくa（のあと）に気音が存在し、その気音が消失しつつあったためと思われます。また同じように中古音「快」（蟹摂夬韻：灰韻去声khuai）の借用漢字音の쾡（khoai’）の終声ㅇ（’）は口蓋垂鼻音(/ɴ/）であったと考えるとよいでしょう。そして中古音「高」（効摂豪韻kau）の借用漢字音の고ᇢ（koW）の終声ㅱ（W）はoɴのような音であったと考えるとよいでしょう。このように考えるとㅱやㅇ（またㅸ）は終声の定義にあわすために単に中声のあとに付加されたものではなく、実体のある音であったといえるでしょう。

ところでそのほかにもㅱ字は『海東諸國紀』附載の「語音翻譯」（1501年）で「我是日本國的人ᄝᅶᆫ야마도피쥬」（Woan‘jamatophicju：「私（は）大和人」：東條　昭和44：写真版1）のように琉訳のなかで使用されています。そこでこの‘ᄝᅶᆫ’は現代の首里語「‘wan⓪（名）わたし。私」（国立国語研究所編　昭和51：590）の当時の音を写したものと考えることができそうです（金東昭　2003:129にも）。

そこでこのᄝᅶᆫの音がどのような音であるかを知るために当時の『伊路呂波』『倭語類解』、『捷解新語』におけるウ・ワの表記を次にみてみます（濱田　昭和45：80,18,80より作表）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 1492年 | 17世紀から18初め | 1676年開版 |
| 『伊路波』 | 『倭語類解』 | 『捷解新語』 |
| ウ | Wu（ᄝᅮ）,’u（우） | ’u （우） | ’u |
| サ・タ行のウ | ’u（우） | ’ɨ （으） | ’u |
| ハ行のフ | fu（ᄫᅮ）, hu（후） | hu（후） | hu |
| その他の行のウ | ’u（우） | ’u （우） | ’u |
| ワ | ’oa（와） | ’oa（와） | ’oa（=wa） |
| 漢字「京」 | kyoW | kio’u （교우） | - |

＊翻字は統一しました。

＊漢字「京」の原綴りは『伊路波』未見のため未記入。『倭語類解』は京都大學國文學會　昭和33：6,66。

＊『伊路波』の「日本文字は‘は[fa]’行の子音を‘ㅸ’で記しているのを見ると、外国の[f]音の転写にこの‘ㅸ’を利用したのが15世紀からであったことを知ることが出来、また‘う[u]’を‘ᄝᅮ’で記しているのも独特である」（金東昭　2003:132）

上表からわかるように本土方言のワは와（’oa）で、「語音翻譯」のワ（首里方言）はᄝᅶᆫ（Woan）なのでそれらは同音ではなかったとみなければなりません。そこで当時の首里方言のワの音はuan(완)ではなくhwan（ᄫᅪᆫ：Φan）のような音であったとみることができそうですが、もしそうならΦan→wan（現代音）のようなありえない変化を考えなければなりません。またそれ以上に『伊路波』ではフ（Φu：ᄫᅮ）が使用されていてファ（Φa：ᄫᅡ）の表記が可能だったとみられることからᄝᅶᆫ（Woan）ではなくᄫᅪᆫ（Φan）と表記されたのではないでしょうか。そこで『伊路波』のᄝᅮ(Wu)はウ（우　’u）の変種をあらわしたと考えられます。そしてさきほど中古音「高」（고ᇢ　koW）の終声ㅱ（W）をɴ（口蓋垂鼻音）と考えたので、これらからᄝᅶᆫ（Woan）はuɴan（ウンアンのような音）と考えることができるでしょう。このように考えるとウは우（u）とᄝᅮ(uɴ)、またフはᄫᅮ（Φu）と후（hu）、本土方言のワは와（’oa、のちwa）、首里方言の「我」はᄝᅶᆫ(Woan、のちwan)とうまく解釈できるでしょう。

ここでこれらの特殊表記をまとめておきます。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | ㅸ（f） | ㆆ（ʔ） | ㅱ(W) | ㅇ（’） |
| 語頭例 | ᄫᅮ（Φu：フ） | ᅙᅵᇙ（ʔiｒʔ：「一」） | ᄝᅶᆫ（Woan：「我」） | 일（’iｒ：「一」） |
| 語末 | 入声薬韻（iak）に | 入声質韻（iět）に | -w系字音（効摂と流摂）の終りに | -j系字音（蟹摂）の終りに |
| 語末例 | -（原本未見） | 지ᇙcirʔ（「質」） | 고ᇢkoW（「高」効摂豪韻kau）ᄝᅮ(Wu：『伊呂波』) | 쾡khoai’（「快」蟹摂夬韻khuai） |
| 備考  | 『四聲通解』凡例中（姜　1993：225） | 『東国正韻序』（姜　1993：99） |

1. 半歯音字を考える

ここでは半歯音字ㅿについて考えます。『訓民正音』（解例本）の例義で「ㅿ、半歯音。「穣」字の初めに発する音と同じである」「ㅿは不清不濁である」（ともに趙　2010：18，35）と規定されていて、その音価はz（中古音日母に対応）とみられています。中期朝鮮語と現代語の例をみてみます。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 語 | 『鷄林類事』など | 現代語 |
| A | 秋 | ᄀᆞᅀᆞᆯkʌzʌr | 가을ka’ɨr |
| B | 心 | ᄆᆞᅀᆞᆷmʌzʌm（心懐） | 마음ma’ɨm |
| C | 狐 | 여ᅀᆞjezʌ | 여우je’u |
| D | 邊 | ᄀᆞᇫkʌz | 가kʌ |
| E | こそ（助詞） | ᅀᅡza | 야 ’ya |

＊A：「秋察」：ᄀᆞᅀᆞᆯ（『三國遺事』の月明師營齋歌）。「秋」:ᄀᆞᄋᆞᆯ（杜詩諺解四ノ一二）。「秋」:ᄀᆞᅀᆞᆯ（字會上ノ一）（すべて前間　昭和49：189）。

＊B：「心曰心音尋（改行）심」（前間　昭和49：240）。「心」: ᄆᆞᅀᆞᆷ（小倉　昭和50：231）。

＊C・D・E：小倉　昭和50：231。
＊E：「強勢の添詞ᅀᅡ（za）は古代の「沙」に遡及するものである」（李　1975：198）。「沙」は中古音日母歯音2等sʌ。

上の比較からㅿの消失もしくは으などへの変化がみられるのがわかります。そしてこのような変化は『訓民正音』（解例本）より少し後の「『杜詩諺解』（一五－四七、二三－一〇）（筆者注：1481年）と『救急簡易方』（一－一九）（筆者注：1489年）に、sʌzi（間）ではなくsʌiが見え」、漢字音でも「二ziのi、日zirのir、人zinのin等」（ともに李　1975：147）のような変化がみられます。このようにㅿは「15世紀の間はわずかな例外原注2を除きおおむね維持されていたと考えられるが，15世紀末に変化の兆しが見えはじめ，16世紀の後半になって消滅したと考えられ」（福井　2013：193）ています。また『鷄林類事』（12世紀初頭）より少しのちの『郷薬救急方』（13世紀中葉）にみえる「兎糸子　鳥伊麻」「苦参　板麻」の「鳥伊麻」「板麻」にも「＊saisam, ＊nersamと読まねばならないであろうのに、後期中世文献にこれらがsaizam,nəzamと現われ」（李　1975：112）ています。そして15世紀の「＊türse（二+三）>＊türze>tuzə[二三の]，＊phərseri（草+間）>phərzeri>phəɨzəri[草叢の中]，hanzum（嘆息）もやはりこれと同じ時に、hansüm（大なる+息）から変化したものと考えられ」（[　]内は李氏の注を筆者が追加：同書同ページ）ています。またこのㅿにおける「s>zの変化はy（二重母音の副音）、r，nと母音の間という、非常に特殊な環境においてのみ生じたことが確認され」（同書同ページ）ています。そしてこのㅿは主に体言や用言の語幹末子音にも見られ、次のように全清ㅅ（s）との交代がみられます（福井　2013：40）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | -ko | -(ɨ)mjen | -a/e |
| ciz-「作る」 | cisko | cizɨmjen | cize |
| pes- 「脱ぐ」 | pesko | pesɨmjen | pese |

　上のような変化を総合するとㅿはㅅ（通説ではs）が語中で有声化してzとなり、16世紀の後半になって消滅したと考えられそうですが、疑問があります。最初に紹介したようにㅿは中古音の「穣」字（日母：通説ではɲやȵʑなど）に対応し、制字解では「ㅿは不清不濁である」（趙　2010：35）と明らかに規定されています。そして『訓民正音』（解例本）の終声解では緩急は「歯音のㅿとㅅ」（同書：84）と規定されていて、「終声の緩急については、「緩」（=舒出）」が概して鼻音、「急（=促呼）」が概して閉鎖音」（同書：85）であると見られています。また終声については「終声はた初声を用いる」（趙　2010：22,姜　1993：158の『訓民正音』（諺解本）の写真図版と訳注）との記述がありますが、初声のㅿと終声のㅿが違うという記述は見られません。そこで初声のㅿと終声のㅿを同音とみると「緩急」の規定からㅿはㅅ（s）の有声音zではなく、nのようなある種の鼻音であったと考えなければなりません。そしてもしㅿがㅅ（s）の有声音化したものであれば中古音全濁邪母字（z）で規定されるべきで、もしそうであればㅿは各自並書ssで表記されたとしても不思議ではないでしょう。前々節で ’（‘ゆるやかな声立て’）と ʔ（‘はっきりした声立て’）の対立と考えることで喉音ㅇとㆆの緩急の規定を無理なく解釈できました。そこでここでもㅿをz（有声歯茎摩擦音）、ㅅをs（無声歯茎摩擦音）とする通説は破棄して緩急の規定どおりㅿを不清不濁の鼻音、ㅅを無声子音と考えます。ところで先に紹介した「邊」（kʌz→kʌ）や『救急簡易方』の「間」（sʌzi→sʌi）のようなㅿの消失変化をみると先に考察したㅇ（ ’）の変化と似ているのがわかります。そこでとりあえずㅅをsもどきの***s***（清声）、不清不濁の鼻音をnもどきの***n***（鼻音）と考えてみます。すると***s***ʌ***n***i→***s***ʌi（「間」）やci***ns***（「作る」）+ko→ci***n***sko→cisko（***n***の消失代償によるsへの変化）、またhan（「大きい」）+***s***um（「息」）→ha***ns***um（翻字hanzum）→hansum（「嘆息」：現代音）と説明できるでしょう。ㅿの問題は次回の更新で再び考えることにします。

1. 各自並書とㅭ（rʔ）との関係を考える

ここで各自並書と未実現連体形語尾ㅭ（rʔ）との関係を考えることにします。各自並書とは同じ単子音を横に並べて書くもので、制字解で中古音の全濁に対応すると規定されています。
　次に各自並書の例をみてみます（福井　2013:83）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 各自並書 | 接辞・用例 | 備考 |
| ㄲ（kk） | -ㄹ까(-rkka),-ㄹ꼬(rkko) | 疑問法語尾 |
| ㄸ（tt） | -ㄹ따-rtta) | 疑問法語尾 |
| ㅃ（pp） | ᄒᆞᆯ빠（hʌrppa） | 「〜するところ」（孟諺4：10a） |
| ㅆ（ss） | 쓰-（ssɨ-） | 「書く」 |
| ㅉ（cc） | 살찌-(sarcci-) | 「しわができる」 |
| ㆅ（hh） | ᅘᅧ（hhje-） | 「引く」 |
| ㆀ（’’） | 긔ᅇᅧ（koi’’je） | 「愛される」 |
| ㅥ（nn） | 다ᄔᆞ니라（tannʌnira） | 『訓民正音』（諺解本） |

＊ㅎ（h）/ㆅ（hh）：혀（hye：「舌」）とᅘᅧ（hhje：「引く」）（趙　2010：92）。「hhの音価は問題があるが（河野六郎（1989，1994：146）では[ʔç]と推定している）,17世紀になってhhがshという形で再び用いられるようになったのはこの解釈にとって示唆的である」（福井　2013:63）。hh→shの変化は第15節を見てください。
＊ㅇ（’）/ᅇ（’’）：괴여（koi’je:「愛する」）と괴ᅇᅧ（koi’’je：「愛される」）。「ᅇᅧ等は15世紀文献では使役形および被動の表記に用いられた。」「ᄒᆡᅇᅧ：ᄒᆞ＋ᅵ　ᄒᆞ다（為）の使役形。「するようにさせて」」（ともに姜　1993：151）。
＊ㅥ（nn）：「닿（付）+ᄂᆞ（現在）+니+라→닫ᄂᆞ니라→단ᄂᆞ니라→다ᄔᆞ니라。（略）「付くのである」」（姜　1993：162）。

＊声調（傍点）は略。

これらの各自並書のなかで「固有語で語頭にくることができたのはㅆ（ss）とㆅ（hh）のみであり、それ以外のものは語中で，文法の形態素の連続においてしか見られな」（福井　2013:83）く、「ㅃ」（pp）に至っては未実現連体形とpの連語的結合による重子音化の例しかみられ」（ともに同書同ページ）ず各自並書字の発現は偏在しています（子音体系の不均衡については同書:62-3）。

ところで『月印釋譜』と『法華經諺解』との表記には次のような違いがみられます（同書：81）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| A | 佛道 | 求ᄒᆞᇙ | 사ᄅᆞ미 | 月釋18：60a |
| ppurʔttow | kkuw-hʌ-rʔ | sarʌm-i | 「仏道を求める人が・・・」 |
| B | 佛道 | 求ᄒᆞᆯ | 싸ᄅᆞ미 | 法華1:242a |
| ppurʔttow | kkuw-hʌ-r | ssarʌm-i | （同上） |

＊未実現連体形語尾（ㅭrʔ）に用いられた福井氏のqは ʔに、また-rq（ㅭ）も-rʔに変えました。以下、翻字は同様。

また『東国正韻』と現代語にも次のような違いがみられます（同書：80）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 字音語：「決断」 | 表記 | 翻字 | 発音 |
| 東国正韻 | ᄀᆑᇙᄃᅶᆫ | kjujerʔtwan | kjujerʔtwan |
| 現代語 | 결단 | kjertan | kjerʔtan |

このように「ハングル創制以後，『圓覺經諺解』（1465）以前の文献におけるこの語尾の表記は-rqが原則である。後続する名詞がk-,t-,p-,s-,c-ではじまるときは，次のaないしbで表記され（略）」（例とともに同書：63）、次のような違いがみられます。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| a | ㅭ+C（-rʔ+C-） | -rʔ k- | -rʔ t- | -rʔ p- | -rʔ s- | -rʔ c- |
| b | ㄹ+CC（-r+CC-） | -r kk- | -r tt- | -r pp-（原注7） | -r ss- | -r cc- |

＊C：子音（k,t,p,s,c）。CC：各自並書（kk,tt,pp,ss,cc）。ㅭ（rʔ）：未実現連体形語尾。なお原注7は省略。

＊「（a）は『釋譜詳節』，『月印釋譜』など比較的早い時期の文献に多く，(b)は『楞巖經諺解』，『法華經諺解』など1461年以降の刊經都監刊行の仏書諺解に多く見られ」（同書：64）るそうです。

上のbにみられるように「現代語の場合，rで終わる漢字の後に，t,s,cのいずれかではじまる漢字が後続するとそれらは規則的に濃音化され」（同書：80）ます。そこで『月印釋譜』（a）の未実現連体形語尾ㅭ（-rʔ）と次音節Cの結合（rʔ‖C、‖は音節境界）がその後r‖ʔCのように変化したため『法華經諺解』（b）の濃音表記がみられるようになったと考えることができるでしょう。つまり上例のhʌrʔ sarʌm-iからhʌr ssarʌm-iへの変化をㅭ‖C（単書表記）→ㄹ‖CC（各自並書表記：濃音）への変化として説明できると思われます。また最初に紹介した表のㄹ까/ㄹ꼬/ㄹ따の疑問法語尾やᄒᆞᆯ빠（hʌrppa）（「〜するところ」）に並書表記がみられることもrʔ ka/rʔ ko/rʔ ta/hʌrʔ pa→r kka/r kko/r ttaやhʌr ppaへの変化によると考えることができるでしょう。そこで未実現連体形語尾ㅭの声門閉鎖音ㆆ（ ʔ）が存在しているうちは後続音節が濃音化して並書表記され、その後ㆆそのものが消失したため後続音節は濃音化することができなくなり、「圓覺經諺解」（1465年刊）以降「各自並書とq（ ʔ）の廃止」（同書：65）されたため「16世紀末に至るまで大部分の文献において-rのみで表記され」（同書：64）たと考えることができるでしょう。
　この考えを図式化すると次のようになります。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 表記 | 発音 | 備考 |
| A | 各自並書表記 | ㅭ‖C→ㄹ‖CC | rʔ‖C→r‖ʔC | 音節境界が変化し、ㆆにより次音節が濃音化 |
| B | 単書表記 | ㅭ‖C→ㄹ‖C | rʔ‖C→r‖C | ㆆの消失により次音節が濃音化せず |

＊A:「圓覺經諺解」まで。B:「圓覺經諺解」以降。

ところで『東国正韻序』では伝来漢字音の入声ㅭの特殊性について次のような記述があります（福井　2013:80）。

「古い中国語の入声韻尾p,t,kは韓国語の伝来字音においてはp,r,kで現れ，tに対応するのがr（音声的には[l]）である点が特徴で、これは中世語でも現代語でも同じである。このうち，tに対応する入声韻尾が‘ㅭ’（rq=rʔ）で表される点が，東国正韻の「人工性」を表す例としてよく挙げられてきた。」

上の記述ではㅭ（rʔ）の表記は東国正韻の人工性を表わしているとされ、そこにみえる声門閉鎖音（ ʔ）は固有語には不要であったかのように説明されています。しかし上で考えたことに重きをおけば声門閉鎖音（ ʔ）は固有語（中期朝鮮語）に欠くべからずの音であったということができるでしょう。ところで上の「qk=kk,qt=tt,…などの等式は，「各自並書」が音声学的には単なる重子音ではなく，何らかの喉頭の働きが加わっていたことを示している。とすれば，これらの発音は音声学的には今日の濃音とほとんどかわらないものだった」（上書：74）と考えることが通説となっています。しかしここで疑問が起こるのですが、この各自並書の発音は濃音と同じ（全同）だったのでしょうか、それともほとんど同じ（相同）だったのでしょうか。取るに足りない疑問にみえますが、実は大きな問題です。
　私の疑問がよくわかるように先ほどの図式を用いて比較すると、次のようになります。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 『月印釋譜』（1459年） | 下の表記は存在しません | 『法華經諺解』（1463年） |
| 表記 | ᄒᆞᇙ사ᄅᆞ미 | ᄒᆞᆯㆆ사ᄅᆞ미 | ᄒᆞᆯ싸ᄅᆞ미 |
| 発音 | hʌrʔ-sarʌmi--→ | hʌr-ʔ-sarʌmi--→ | hʌr-ʔsarʌmi |
| 翻字 | hʌrʔ‖sarʌmi→ | hʌr‖ʔ‖sarʌmi→ | hʌr‖ssarʌmi |

＊『圓覚經諺解』（1465年）以降、ㆆと各自並書が廃止。

＊説明のために‖（音節境界）や－（息のごくわずかの休止）の符号を用いています。

私の疑問とは次のようなものです。『訓民正韻』（解例本）（1446年）から『月印釋譜』（1459年）〜『法華經諺解』（1463年）〜『圓覚經諺解』（1465年）までわずか20年ばかりの短い期間なので常識的に考えてこのあいだには音の変化はなかった（全同）、あるいは変化の途上にあってほとんど同じ（相同）であったと思われます。そこで『月印釋譜』でhʌrʔ‖sarʌmiによって表記されたhʌrʔ-sarʌmiの ʔ（ㆆ）が後続音節に移動し、hʌr-ʔsarʌmiになった音は『法華經諺解』でhʌr‖ssarʌmiと表記されたと考えることができます。しかしhʌrʔ-sarʌmiとhʌr-ʔsarʌmiの音は違ったのでしょうか。もしhʌrʔ-sarʌmiの ʔ（ㆆ）が後続音節に移動したのであれば「ㆆと各自並書が廃止された」『圓覚經諺解』（1465年）以前の『法華經諺解』（1463年）ではㆆの使用が可能だったと考えられ、hʌr‖ssarʌmiではなくㆆを使ったhʌr‖ʔ‖sarʌmiの表記ができたのではないでしょうか。ㆆが中世韓国語の語頭や語間に存在したか、しなかったかは証明すべきものです。それなのにㆆが固有語には存在しなかったために『法華經諺解』ではhʌr‖ʔ‖sarʌmiではなくhʌr‖ssarʌmiの表記がなされたと考えるのは本末転倒ではないでしょうか。ささいな疑問は大事にしなければなりません。そこでこの疑問を解くためにhʌr‖ʔ‖sarʌmiの表記がなされなかった事実は認め、hʌrʔ‖sarʌmi（単書表記）→hʌr‖ssarʌmi（各自並書表記）の変化を考えます。そのためその当時の各自並書された音は通説の濃音でなく、濃音はその後近代に入って発生したと考えます。つまり現在の濃音であるhʌrʔsarʌmiではない各自並書表記されたXを考え、hʌrʔ‖sarʌmi（Y：『月印釋譜』）→hʌr‖ssarʌmi（X：『法華經諺解』）→hʌr‖ssarʌmi（近代以降に濃音）のような変化を考えます。そして『月印釋譜』から『法華經諺解』、また現代にいたる音はまったく同じ（厳密にいえばそれらにはわずかな違いがあり相同）だったがそれらの表記には変化があったと考えるのです。音が全同であるのにYとX、またその後の音とのあいだにわずかな違いがあったと考えるのは矛盾しますが、そうではなく同音であるXとYやその後の音を違う側面から見たためにその見方の違いがhʌrʔ‖sarʌmi（『月印釋譜』）→hʌr‖ssarʌmi（『法華經諺解』）→hʌr‖sarʌmi（『圓覚經諺解』以後）→hʌr‖ssarʌmi(現在)のような表記の違いとしてみられたと考えるのです。たしかに発音が全く同じ（全同）であったのにその表記は変化したというアイディアよりは相同であった（YとXが違っていた）ために表記が違ったと考えるほうが理に適ってはいます。しかしいまは全同であったと考え（16節をみてください）、その全同の音が『圓覚經諺解』以後現代に至るあいだに濃音化したと考え考察を進めることにします。
　では濃音化する時期を通説よりももっと近代にもってくるとして、濃音表記ではない『法華經諺解』の各自並書表記されたhʌr-ssarʌmi（X）はどんな音だったのでしょうか。この問題を解くためには多くの考えるべきことがあります。これから一つ一つ考えていくことにします。

1. 激音を考える

まず激音について考えることにします。激音（有気音Ch）の起源は音節末のhと音節頭のhの影響によるとみられています（福井　2013:39，156）。

「現代語で語頭に激音すなわち無声有気音をもつ語のうち、中世語で激音ではなく平音をもっていたものには，/karh/「刀」，/koh/「鼻」，/pʌrh/「腕」などがある。現代語ではそれぞれkhar[khal],kho[kho],phar[phal]となっている。」

「『鶏林類事』に「乗馬曰轄打」，「大曰黒根」と記されている語形は，それぞれ中世語のthʌ-「乗る」，khɨ-「大きい」の前身の\*hʌtʌ-，\*hɨkɨ-という形を記録したものと見ることが可能である（李基文　1991:18,Ramsey 1997:138原注）。」

上の例から激音はkarh→khar（「刀」）、hʌtʌ→htʌ→thʌ（「乗る」）のようにそれぞれ音節末、あるいは音節頭のh（気音）の影響によって有気音が発生したと見られます。
　ここでこの変化を次のように定式化します。

CVhV→CVhØ→ChV

hVCV→hØCV→ChV

　＊C：無気子音。Ch：有気子音。V：母音。Ø：消失。h：無声声門閉鎖音。

牙音字については『東国正韻序』（1447年）に次のような記述がみられます（姜　1993：200）。

「もしも牙音について言うならば，渓母（k‘）に属する字がほとんど見母（k）で発音されるが（筆者注：原文は「入於見母」），これは字母の変化である。渓母（k‘）に属する字が暁母（h）では発音されるものもあって（筆者注：原文は「入於曉母」），これは七音の変化である。（中略）韓国語では渓母（k‘ -ㅋ）音を多く用いているのに，字音においては「夬」字の一音のみである。これがもっとも笑うべきことである。」

　上の原文にある「入於見母」「入於暁母」に対する姜氏の注は次のようになっています（同書：201）。

「（16）入於見母：漢語の字音でk‘-であった字音が，韓国漢字音でk-になったものを指す。[例]　開　空　苦　啓　曲　器等（改行）

（17） 入於暁母：漢語の字音k‘-であった字音が，韓国漢字音ではh-になったものを指す。[例]　墟、咳，虧，抗，沆，確等」。

　＊k‘：有気音kh。以下khで表記します。

たとえば牙音字の中古音と現代音の対応は次のようになっています。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 中古音 | 現代語 | 日本語（漢音） |
| 見母（k） | 「間」kan | kan（간） | カン |
| 「干」kan | han（한） | カン |
| 渓母（kh） | 「開」khəi | kai（개） | カイ |
| 「抗」khaŋ | haŋ（항） | コウ |
| 暁母（h） | 「漢」han | han（한） | カン |

上表から中国語中古音と現代韓国語の牙喉音のk（見母）はk/h、またkh（渓母）はk/h、そしてh（暁母）はhのように対応しているのがわかります。そこで素朴な疑問が起こります。『訓民正音』（解例本）の例義において無気音のㄱ（k）も有気音のㅋ（kh）も声門摩擦音のㅎ（h）も規定されています（趙　2010：10，17）。そして用字例にも「∶감「柿」、「콩「大豆」や「∙힘「筋」」（同書：106,106,106）などㄱ・ㅋ・ㅎがみられることから中期朝鮮語の固有語の頭音にはk・kh・hがあったとみられます。ではなぜ中古音の見・渓母の「干」や「抗」が当時の朝鮮語に借用されてh（ㅎ：暁母に対応する）のような音になったのでしょうか。たとえば中古音暁母の「漢」（han）を日本語に借用した当時、日本語にはh/ɦ（暁・匣母）音が存在しなかったためにhanに近い牙音字見母のkanで借用するしかなかった、そのため中古音「漢」（han）は「カン」として日本に定着したのだとする考えがあります。たしかに当時の日本語にhやɦ音がなければそれに一番近いk音で借用するしかなかったのかなあと変に納得する説明です。しかしもし当時の朝鮮語にk/kh/h音が存在していたのであれば中古音「干」（kan）はkanで、「抗」（khaŋ）はkhaŋで借用することができ、わざわざhanで借用する必要はなかったのではないでしょうか。それとも中古音「干」（kan）・「抗」（khaŋ）はkan/khaŋで借用したのだがその後朝鮮語のほうに何か理由があってkan→han、khaŋ→haŋのように変化したのでしょうか。「牙音では，朝鮮漢字音において有気音で現れるものが事実上「快」1字しかない，という状況になっている。このことから，河野六郎（1964-67）では，漢字音導入当時の韓国語は，有気/無気の対立がなかった（李氏の有気音の存在を述べる記述以下は省略）」（福井　2013:156）と考えてみてもその対立のない牙音をKとすれば漢字音導入当時には少なくともKはあったのですから中古音kanやkhaŋをKanやKaŋで借用できたはずです。そうすると牙音字の「干」・「抗」をKanやKaŋで借用せずにわざわざKanやKaŋよりも音の違いが大きいhanやhaŋで借用したのはなぜでしょうか。あるいはKanやKaŋで借用したあと朝鮮語内でhanやhaŋに変化したと考えればその理由はなんでしょうか。これは問うに価する疑問です。
　ここで閉鎖音の気音の音声一般の傾向をみておきます。「日本語と中国語の気音の強さの違いについては、北京語を話す黄國彦氏が日本語（東京方言）に接した際の次のような観察があります（森博達　1991:101）。

「黄氏の観察によれば、語頭ではいずれも有気音に聞こえるが、「語中に来る場合、/k/の気音がもっとも強く、/t/の気音がもっとも弱く、/p/はその中間ぐらいのようである」と指摘している。」

　日本語の閉鎖音p/t/kの間に上のような違いがみられるのですが、音声学的にみてこのような傾向は世界の言語に共通なのかもしれません。また「シナ語（北京）の有氣の[p‛][t‛][k‛]，蒙古語の（ホロンバイル）の語頭の[t‛][p‛]や朝鮮語の激音（ㅍㅌㅋ）のそれは，日本語の[p][t][k]よりは氣音が強く長く，ことに朝鮮語のそれは強い」（服部　1951：138）といった言語間の違いも見られます。そこで中国語と朝鮮語とのあいだの気音の強さの違いが「干」（kan）・「抗」（khaŋ）をhan/haŋで借用させたか、あるいはkan/khaŋで借用した後han/haŋに変化させた原因であるかもしれません。しかしあまり（全く）問題にされていないことがあります。中古音喉音の暁・匣母がh/ɦ（無声・有声声門閉鎖音）あるいはx/ɣ（無声・有声軟口蓋摩擦音）だとする考え方は正しいのでしょうか。ここまで中古音暁母をhと考えたうえで中古音見母（k）・渓母（kh）字がh（ㅎ）で借用されてきたことの不合理さをみてきました。あたりまえのことですが、朝鮮漢字音のㅎは例義で「虚」字（中古音の暁母）（趙　2010：17）で規定されているので中古音暁母がhであったかどうかは重大な問題です。そこで中古音見・渓母の「干」「抗」がh（ㅎ）で借用された、あるいは借用後hに変化したという考えの不合理さを解消するために通説（暁母：h/xなど）を破棄して中古音暁母はhではなく、k（見母）によく似たkもどきの***k***と考えてみます。すると中古音見渓暁母と借用時の朝鮮漢字音との対応、またその後の変化を次のように考えることができるでしょう。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 中古音 | 古代朝鮮語 | 古代日本語 |
| 見母（k） | 「間」（kan） | kan→kan | kan→カン |
| 「干」（kan） | kan→***k***an→han | ***k***an→カン |
| 渓母（kh） | 「開」（khəi） | khai→kai | khəi→カン |
| 「抗」（khan） | khaŋ→***k***aŋ→haŋ | ***k***əi→コウ |
| 暁母（***k***） | 「漢」（***k***an） | ***k***an→han | ***k***an→カン |

＊中古音の見渓母の一部にkもどきの***k***を考えます。

このように中古音暁母をkもどきの***k***と考えると、見母（k）と渓母（kh）に気音の違いがあったとしてもそれらをともにkによく似た***k***で受け入れたこと、また見・渓母内部でともにk/***k***で借用したりすること、あるいは見・渓母で借用した後朝鮮語内部でそれぞれk→k/***k***、kh→k/***k***のように変化したと考えることができ、k/khとhのように音の違いが大きい変化（k/kh→h）を考えるよりは無理がないと考えられるでしょう。中古音借用時か、あるいは借用後の変化かはいま問わないとしてもこのアイディアにも見母の「干」と渓母の「抗」がk/kh→***k***のように同じ変化をすることや同じ見・渓母のなかでなぜk→k/***k***と、kh→k/***k***のように違った変化をするのかといった問題など考えるべきことはあります。kもどきの***k***については次回更新で考えることにします。

1. 合用並書表記を考える

前々節で各自並書表記について考えましたが、ここではもう一つの合用並書表記について考えます。『訓民正音』（解例本）合字解では各自並書（CC）だけでなく「・ᄯᅡ「地」」などのように「初声字を二字・三字組みあわせて並書する」（例ととも趙　2010：92）表記を合用並書として規定しています。その合用並書にはsC（C：子音）のような頭子音をもつs-系複子音とpCのような頭子音をもつp-系複子音の2種があります。

次に例をみてみます（福井　2013：38、54-5）。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 種類 | 語形 | 意味 | 現代語（表記） |
| s-系 | sk- | skori | 「尾」 | 꼬리（kkori） |
| st- | stʌｒ | 「娘」 | 딸（ttar） |
| sp- | spam | 「頬」 | 뺨（ppjam） |
| p-系 | pt- | ptʌ- | 「摘む」 | 따（tta-） |
| ps- | psʌｒ | 「米」 | 쌀（ssar） |
| pc- | pcak | 「双」 | 짝（ccak） |
| pth- | pthʌ- | 「弾く」 | 타（tha-） |
| psk- | pskai | 「胡麻」 | 깨（kkai） |
| pst- | pstai | 「時」 | 때（ttai） |

＊s-系にはもう一種sn-（例：snahʌi（「男」））がありますが、「これはsʌnahʌiの第1音節のʌを落とした語形である（略）」（上書：54）。

上の例でわかるように中世語にはs-系とp-系の2種の合用並書が存在したのですが、p-系複子音については『雞林類事』（12世紀）の語例から次のようなことが考えられています（前田　昭和49：244,262）。

「白米曰漢菩薩（改行）ᄒᆡᆫᄡᆞᆯ（hʌin psʌr：翻字は筆者）（略）「」の字でㅂを寫したものである。鮮初には稻米はただ（一：原注）ᄡᆞᆯをいふを常とした。（以下略、改行）
「粟曰菩薩（改行）ᄡᆞᆯ（略）鮮初には粟米は特に（原注一）조ᄡᆞᆯ（co psʌr）といつて。粟は（原注二）조（co）といった（下略）」
「白曰漢」（改行）ᄒᆡᆫ（hʌin）（略）　（原注一）ᄒᆡを連體法に語つた形である。」

そこでpVsʌr（米）→pøsʌr→ssar（V：消失しやすい母音、ø：消失）の変化を想定するとpsʌrのpは現在ip ssar(粳）、cop ssar(粟)やchap ssʌr(糯米）の語の前音節の音節末に残っていると考えられます。同じように「現代語のip・ttai（この時→今だに）、cəp・ttai（あの時、先日）のpは、中世語のpstai（時）のpが化石化したものである」（李　1975：151）と考えられます。また「15世紀文献のhʌn・pskɨi（一時に）が、16世紀文献ではhʌm・skɨi（一緒に）と現われる。（現代語のhʌm・kkəi、一緒に）ここでhʌnのnがmになったのは、pskɨiのpの影響だとしなくては説明することができない」（同書同ページ）という考えがあります。このように「現代語にも複合語のなかにpが化石的に残っている例があるため，pが実際に発音されていたであろうことは確実と考えられて」（福井　2013：56）（注17）います。

ところでもう一つのs-系複子音は中期朝鮮語においてすでに濃音化（sC→ ʔC）していたとする濃音説（注18）とその当時はまだsCのような複子音であり、その後濃音化したと考える複子音説の二つがあります。ここでそれらの説（福井　2013：56-8）を紹介することは省略し、sの残存とみられる語例を紹介することにします。

『海東諸國紀』附載の「語音翻譯」（1501年）に中国語の「清早」（（早）朝の意）を当時の首里語で「ᄯᅩ믜디」（stomɨiti：東條　昭和44：写真版p4）と訳していて、これは「sutumiti⓪（名）朝。「つとめて」に対応する。sutimitiとも」（国立国語研編　昭和51：498）と考えることができます。もうひとつは文禄慶長の役（壬辰倭乱）について書かれた軍記物『陰徳記』（巻七六）所載の「高麗詞之事」にみられるもので、「「日朝会話集」とでも名付くべきもの」（布引　1984.6：18-9）にでてくる語です。次にその語例（同書：18-9）をみてみます。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 語例 | 「高麗詞之事」 | 想定される翻字 | 『雞林類事』 | 現代語 |
| 13 | 女子 | スタリ | stʌｒ | 「女兒曰寳妲」A | ttar（娘） |
| 84 | 帯 | ステイ | stɨi | 「女子勒帛曰實帶」B | tti |
| 117 | ノミ（鑿） | クル | pskɨr,skɨr（注19） | - | kkɨr |

＊同様の考察は福井（2013：59-62）にもあります。
＊A：「〜寳妲」のあとの割注は「亦曰古召曹兒」（前間　昭和49：233）。

＊B：「「」でㅅ音を寫したのである。ᄯᅴは上文「帶曰」の下にある」（同書：261）。「帶曰腰帶亦曰謁子帶」（同書：258）の割注「子帶」はstɨi。

上の引用からわかるように「女子」「帯」の語が「高麗詞之事」で「スタリ」「ステイ」と記されていることからその当時初頭音節にｓが存在したとみることができます。そしてそれらの語は現在ttar（娘）/tti（帯）と濃音で発音されるのでその当時それらの語はs-系複子音(sC-)であり、その後濃音化（ ʔC-）したと考えることができるでしょう。
　ところでp-系複子音とｓ-系複子音は現代ソウル方言などではどちらも濃音に変化しているのですが、p-系複子音のpt-,pc-は下表にみられるように済州島方言においては濃音化せず、規則的に有気音になっていて激音化しています（福井　2013：75）。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 中世語 | 陸地方言 | 済州島方言 |
| 激音系複子音 | pt- | ʔt- | th- |
| pc- | ʔc- | ch- |
| pth- | th- | th- |
| 濃音系複子音 | ps- | ʔs- | ʔs- |
| psk- | ʔk- | ʔk- |
| pst- | ʔt-（注20） | ʔt- |

＊済州島方言をもとに名前をつけてみました。

＊福井氏の濃音をあらわす「’」は声門閉鎖音（ʔ：喉頭化音）にかえ、Cʔ（C：子音）は韓国で用いられている ʔCにかえました。

ここで日本語のハ行頭子音にみられるpV→ΦV（Φ：両唇摩擦音）→hV（h：声門摩擦音）の変化とhC（C：子音）→Chの変化を想定すると済州島方言のth/chへの変化をpt/pc→Φt/Φc→ht/hc→th/chのように考える（上書：75）ことができるでしょう。またpth-は音節末hによるptVh→pthVの変化を考えると、激音系複子音の変化は次のように考えることができるでしょう。

激音系複子音：pt/pc→Φt/Φc→ht/hc→th/ch（済州島方言）
ptVh→pthV→thV（陸地方言・済州島方言）

またp-系複子音のうち濃音系のps/psk/pstはpが消失してʔs/sk/st→ʔs/ʔk/ʔtのような変化を想定してみます。このように考えるとp-系複子音とｓ-系複子音の変化は次のようにまとめることができるでしょう。

H複子音：pt/pc（→st/sc）→ʔt/ʔc（陸地方言）

pt/pc→Φt/Φc→ht/hc→th/ch（済州島方言）

ptVh→pthV→thV（陸地方言/済州島方言）

P複子音：ps/psk/pst→ʔs/ʔk/ʔt（陸地方言/済州島方言）

S複子音：sk/st/sp→ʔk/ʔt/ʔp（陸地方言/済州島方言）

＊p-系複子音をH複子音とP複子音の2種にわけ、s-系複子音はｓ複子音としました。

＊陸地方言のpt/pc→st/sc、ps→ʔsの変化については次節で考察します。

そこで上のアイディアをまとめると、次のようになるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 激音 | 濃音 |
|  | p-系複子音 | s-系複子音 |
| 陸地方言 | ptVh→thV | pt/pc→ʔt/ʔc（濃音） | ps/psk/pst→ʔs/ʔk/ʔt | sk/st/sp→ʔk/ʔt/ʔp |
| 済州島方言 | pt/pc→th/ch（激音） |  |
|  | H複子音 | P複子音 | S複子音 |

＊中世以降の並書表記の変遷は注21。

このようにH複子音は済州島方言で激音になり、陸地方言では濃音になっています。またP複子音のpsk/pstは語頭のpが消失しsk/stになり、S複子音と同様濃音化したと考えることができるでしょう（福井　2013：75－6）。

1. s音添加の現象とは何か

前節で中世においてp-系複子音はいまだ濃音化していなかったとみられていること、s-系複子音も複子音であったとみられる事例を紹介しておきました。そこで疑問になるのは中世においてs-系複子音が複子音(sC)でありその後濃音化（ʔC-）したのであればそれはどのようにいつ変化したのでしょうか。

この難問を解くうえで役に立つ表記の変化が近代になって次のように表われます（金東昭　2003：173）。

「그ᅀᅳ->ᄭᅳᅀᅳ-（「牽」）・딯->ᄯᅵᇂ-（「擣」）・사호->싸호-（「闘」）57）」（注22）

上のkɨzɨ（그ᅀᅳ）→skɨzɨ（ᄭᅳᅀᅳ）のような表記の変化は中世の疑問法語尾rka見られます。

第15節でも紹介しますが、その変化は次のようになっています。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 十五世紀中葉 | 16世紀末まで | 17世紀 | 現在 |
| 『月印釋譜』 | 『法華經諺解』 | 『円覚経』以後 | 『捷解新語』 | 「新続三」以後 |
| 表記 | ㅭ가 | ㄹ까 | ㄹ가 | ㄹᄭᅡ | ㄹ까 |
| 翻字 | rʔka | rkka | rka | rska | rkka |

上のㄹ가→ㄹᄭᅡにみられる表記の変化は翻字をもとに仮にs音添加の現象と名づけてみます。

そしてこのように名づけたs音添加の現象にたいしては次のような考えがだされています（福井　2013：194）。

「中世語においては-rkka,-rqkaなどと表記されていた疑問法語尾が-ㄹᄭᅡ（-rska）と表記される例が見られる。これは，各自並書か声門閉鎖音q（筆者注：ʔ）で書かれていた濃音の表記を，そのかわりにsでもできるようになったことを表すものであり，この時期にはs+阻害音が明瞭に濃音化していたことを示す。このことは，s-系複子音の変化が17世紀後半には起こっていたことを示すことになる。（略）」

　また金氏の考えも紹介しておきます（金東昭　2003：114）。

「‘ㅅ’が[s]音を帯びていたとするならば、‘그ᅀᅳ->ᄭᅳᅀᅳ-，딯->ᄯᅵᇂ-’の変化を‘kɨzɨ－>skɨzɨ，tih->stih-’のように語頭に[s]音が添加される変化と見なければならないのだが、このような音韻変化はある筈がないので、この変化は濃音化現象と考えざるを得ないのである。（以下、略）」

　＊現代語の끌다（kkɨrta）：ʔkɨrta「引きつける」。

このように中世以後s音添加の現象が現れるのですが、金氏も疑念をだされているようにㅅ（通説はs）表記の添加をs音添加と考えると矛盾が起きます。そこでこのㅺ（sk）子音は複子音skでなく濃音であったとされています。この通説はㅅ表記の添加をs音添加と直截に考え、それによっておこる矛盾を解決するために生まれたアイディアです。そこでㅅ表記の添加をs音添加と同一視する考えを破棄して新たに次のようなアイディアを考えることにします。kɨzɨにsが生まれ、そのs音がkɨzɨに添加されskɨzɨになったと考えると無からsが生まれたことになり常識に反します。そこでkɨzɨ→skɨzɨのようなありえない変化は考えないでkɨzɨそのものにs音が内在していたと考えることにします。そしてそのかわりにこのs音を内在しているkɨzɨの頭音は濃音（ʔk）ではなく複子音skであったと考え、この複子音skがのち濃音のʔk（表記はkk）に変化したと考えます。このように表記の上ではkɨzɨk→skɨzɨ のような変化がみられたとしてもkɨzɨの音とskɨzɨの音には違いがなかった、つまり同音であったと考えると上の金氏の疑問も解消できます。そして複子音のskɨzɨが近代以降濃音の ʔkɨzɨ（表記はkkɨzɨ）に変化したと考えるとkɨzɨ→skɨzɨの変化をうまく説明できるでしょう。

ところで高麗鮮初時代のㅳ（pt）複子音にも不思議な変化がみられます。前節で『雞林類事』の「寳妲」（ptʌr）や「高麗詞之事」の「スタリ」（stʌr）の合用並書表記をみました。「實帶」がstɨiを表わしていることを根拠に「寳妲」（ptʌｒ）を「「實妲」の誤写であったという可能性も充分考えられる」（福井　2013：73）という見方もあります。しかし「鮮初のᄯᆞᆯは高麗のᄠᆞᆯの轉訛であろう。ㅳ（pt）の音がㅼ（st）に變はるのは麗鮮を通じての傾向（以下、略）」（前間　昭和49：233）なのでᄠᆞᆯ（ptʌr：「寳妲」）→ᄯᆞᆯ（stʌr）の変化とみるほうが自然でしょう。しかし「スタリ」については「十五世紀文献にptʌrと出ずstʌr（娘）と現われている点が理解し難い。＊pɔtɔrが＊ptʌrの段階を経て十五世紀にstʌr（stは濃音）になったと見る外にないのではないか」（李　1975：111）との指摘があります（注21）。そこでこの問題にたいしてもptʌrにs音が添加されstʌrになったと仮に考えてみます。そうするとここでもこのptʌrとstʌrは同音であったが、ptʌrにその後s音が添加されstʌrになったと考えることができるでしょう。このようにs音添加現象を無からs音が添加されたと考えずに同音の異表記であったと考えるとこれらの問題をうまく説明できるでしょう。しかしptʌrとstʌrが同音であったとかkɨzɨとskɨzɨが同音であったとか考えるにはかなり抵抗があるのも事実です。

次節ではこの疑問を解くための前準備として「間のs」について考えることにします。

1. 「間のs」を考える

sa’isi’os（「間のs」）あるいは語間字（사잇소리）とよばれるㅅ（s）について考えます。第６節で音節末子音を表記するための「終声字はㄱㆁㄷㄴㅂㅁㅅㄹの八字母で十分に事足りる」（趙　2010:81）という終声解の記述を紹介しました。たとえば「ᄃᆞᇌᄣᅢ「の刻」」（同書：93）はᄃᆞᆰ（tʌrk鶏）+ㅅ（s：〜の）+ᄣᅢ（pstai時）からなった語（注23）とみられ、このㅅはsa’isi’osといわれ属格とみることができます。
　ところで郷歌ではこの「間のs」（ㅅ）の前身とみられる「叱」がみられます。そこで次に「叱」の用例をみてみます（金完鎭　1980：179，127，123）。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 歌名 | 郷歌 | 金完鎭氏の轉字 | 用法 | 訳 | 備考 |
| A | 随喜功徳歌 | 嫉妬叱心音 | 嫉妬-s-mʌzʌm | 属格（「の」） | 嫉妬の心 | 心音（mʌzʌm） |
| B | 彗星歌 | 城叱肹良 | cas-s-hɨr-raŋ | 末音添記 | 城をば | 城（cas） |
| C | 祭亡妹歌 | 辭叱都 | mar-s-to | 不明 | 言葉も | 辭(mar) |

＊郷歌：「『三国遺事』（1285頃）に伝わる14首と『均如伝』（1075）に伝わる「普賢十願歌」11首を合わせて25首，または，これらに『高麗史』に伝わる1首を合わせて26首残されているものを指す」（福井　2013：181）。
＊用法はとりあえず通説による。
＊「城」（cas）の末音終声がsであることを示すために「城」に「叱」を添記した「城叱」の表記が郷歌に見られます。この「叱」は「末音添記字」と言われています。

上表Aの「叱」は属格とみられ、制字解の「孔子ㅣ魯ㅅ:사ᄅᆞᆷ（孔子ガノヒト）」（趙　2010：95）にみられるㅅはこの「叱」の用法を受け継いだものとみられます。Bの「城叱肹良」は金完鎭氏によってcas（「城」）+s（「叱」）+hɨr（「肹」：対格「を」（注24））+raŋ（「良」）と翻字されて（金完鎭　1986：128）いるので「叱」を「城」（cas）の音節末子音sをあらわす末音添記字と考えることは可能でしょうが、属格とみることは難しいでしょう。またCの「辭叱都」は「は말ᄉᆞᆷ又は말（言葉）、は促音を表はすに用ひられる文字（郷歌第五　の（6）参照）、は도（も）である」（小倉　昭和49：211）と日本語の促音に通じるような何かつまったような音と解釈され（注25）ました。しかしこの「叱」の実体がなんであれ属格と解釈できないことは明らかで、「叱」字を生かしてmar+sto（「言葉また」）と解釈することにも文法的に問題があるでしょう。そこで「辭叱都」は「叱」を無視して「言葉も」と解読されている（金完鎭　1986：125）のですが、祭亡妹歌ではわざわざ「辭叱都」（marsto）と表記されているので、この「叱」には何か意味があるとみるべきでしょう。そこで中世以前に「尸」（通説でr）→「叱」（通説でs）のような変化を考え（注26）「辭叱」の「叱」を末音添記字とみれば「辭叱都」（mar+r+to→marsto：「言葉も」）をうまく解釈できるでしょう。しかしこのような今までにない「尸」→「叱」の変化を考え、「叱」を末音添記字とみるアイディアで「辭叱都」の「叱」をうまく解釈できたとして満足してよいものでしょうか。「城叱肹良」の「叱」を末音添記字とみることで「末音添記字とは何か」という疑問を解く努力を放棄しているのではないでしょうか。この「末音添記字とは何か」という疑問は「ta’ʌrs epsɨni（尽きること　無いが）（法華2：75b）」（福井　2013：64）のrsにつながる問題なので次回詳しく考察することにします。このように上表中のAの「叱」を属格とみることはできてもB・Cの「叱」を属格と解釈することはとてもできないので語間字といわれるㅅの原機能は属格ではないとみるのがよいでしょう。

ところで『訓民正音』（諺解本）では「主に漢字語の場合に，前の字の終声が不清不濁字であったら，同じ系列の全清字を用いた。例えば，君군+ㄷ+字ᄍᆞᆼ（ㄴとㄷは同じ舌音）の如くである。（改行）57）　虯뀨ᇢㅸ字ᄍᆞᆼ：ㅱ（不清不濁字）+ㅸ（同じ唇軽音の全清字）+ᄍᆞᆼ。ᄍᆞᆼのㅇは東国正韻式漢字音の終声」（姜　1993：152）」との記述があります（注27）。また『釋譜詳節』では先行音節の末尾が閉鎖音のとき次のように属格のsが表記されないという特徴がみられ、先行する語の末尾音節が鼻音Nのときは同じ調音位置にある閉鎖音（cを含む）、V・rのときは s/z/ʔで表記されるなど一種の音韻規則がみられます。

Sori（「声」）が後続するばあいをまとめると、次のようになっています（福井　2013：69－70）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | -V s sori | -r s sori | -m s sori | -k ø sori | -p ø sori |
| 例 | sur’uis sori | mʌrs sori | pʌrʌms sori | 地獄 ø sori | kaspup ø sori |

　＊ø：属格sなし。「聖人（-n）s sori」「龍（-ŋ）s sori」など。

上の「君ㄷ字」「虯ㅸ字」の意味は「君の字」「虯の字」なので、このㄷやㅱは属格の「の」にあたるとみることが可能です。しかし同じ系列の全清字のㄷやㅱが音韻規則にしたがっているからといってそれらのㄷやㅱを文法的に属格とすることには問題があるでしょう。そこで先の郷歌の「城叱肹良」や「辭叱都」の「叱」を属格とみることができないように「君ㄷ字」「虯ㅸ字」のㄷ・ㅸも属格とみるのではなく、「君という字」「虯であるところの字」といった属格まがいに解釈したほうがよいでしょう。このように考えると郷歌の「叱」は語間のㅅ（属格まがいのㅅ）へ、そしてその後属格のㅅから「先行語の末音を内破化し、後行語の頭音を濃音化」し、「「濃音記号s」にまで拡大した」（ともに李　1975：140）とみることができるでしょう。
　この考えは次のようにまとめることができるでしょう。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 原機能 | 末音添記 | 属格まがい | 属格 | 濃音記号 |
| 例 | 辭叱都 | 城叱 | 君ㄷ字 | 魯ㅅ사ᄅᆞᆷ | 싸ᄅᆞ미 |

1. sもどきの音を考える

前節で属格ㅅの前身である属格まがいのㅅを想定しましたが、ここではその属格まがいのㅅについて考えます。前節でみたように「叱」の後裔とみられるㅅは現在では属格や濃音化の痕跡として存在しています。郷歌の常随佛學歌には「難行苦行叱願乙」（「難行苦行の願いを」）のように属格の「叱」だけではなく、「然叱皆好尸卜下里」の句にも「叱」がみられます。

この「然叱」については「叱然」の倒置と考えてᄯᅩに読むべきとの小倉氏の次のような考えがあります（小倉　昭和49：129）。

「吏讀に於ては「叱」の位置を轉倒した例がある。例へば「叱分」（ᄲᅮᆫ）を「分叱」とするが如きこれである。故に此の場合ᄯᅩ（筆者注：「叱然」）を「然叱」と書くことは毫も無理な點が無い。」

また上にでてくる「分叱」・「分」と「叱分」については次のような説明がみられます（上書：381-2,455）

「（186）（改頁）（例文数例略）依戊辰例、私禮單（私禮單のみ）贈給。〔海行總載〕（改行）
[註]「分叱」兩字は合して一字とし「分叱」とも書く。「儒胥必知」・「羅麗吏讀」には「分叱不喩」を「ᄲᅮᆫ아닌지」（以下、中略）、「ᄲᅮᆫは「叱分」を以て書き表はすべきであるが（「叱分」の條（N.375）参照）、「分叱」としたのは文字の位置を倒置したものである。「分叱」はまた單に「分」と書くこともある。（改行）

　里長（里長）罪事〔大明律〕（以下、1例略）」

「（375）（改行）（２例略）（自分ばかり）獨在。〔光海朝日記〕（３例略）（改行）[註]「叱分」はᄲᅮᆫと讀み、「のみ」・「ばかり」の義である。「叱」はㅅ、「分」は분に當るものである。」

ところで上の「叱分」（ᄲᅮᆫ）を濃音ではなく、複子音sとみる見方があります（金東昭　2003：171）。

「濃音の発音は現代語と完全に同じではなかったようである。『大明律（直解）』（14世紀末）の‘叱分（ᄲᅮᆫ）・叱段（ᄯᆞᆫ）’と『三國史記』の‘舒弗（ᄲᅳᆯ）’のような表記があるのを見ると、この‘ᄲᅮᆫ・ᄯᆞᆫ・ᄲᅳᆯ’の‘ㅅ’が古代韓国語時代のある時期には[s]と発音されていた可能性はある。（以下、ㅅを[s]と同じと見ての考察がありますが、筆者の考えとは違うため省略）」

さて上に紹介したように「然叱」を「叱然」（sto：現代語tto「また」）の倒置とみるのは一見無謀な考え方です。もちろん「然叱」をそのままに「kule-s」（現代語kuri）（金完鎭　1980：193,196）と解釈する考えもありますが、ここではこれらの解釈の当否についてではなく「叱分」と「分叱」の倒置についてです。たとえば日本では「王」をohと表記することが一部にみられますが、このohの表記はoとhを続けて発音したとするとそのohの発音が「王」の発音に似ることから発案された表記と思われます。そこで上の「叱分」や「分叱」の表記は発音表記の工夫から生まれたと考えると、「叱分」（spun）が「」や「分」とも書かれていることをから「分叱」の表記はpunsやpunではなくpsunのような音を表わそうとしたと考えることができるでしょう。また「叱分」や「分」の表記はどちらも明代の大明律にみられ、「分叱」は清代初頃にみられることからそれらの表記の新古を考えると「叱分」→「分叱」の変化を考えることができるでしょう。しかし「叱分」→「分叱」の表記の変化を上のように発音の変化とみるとspun→psunのような変化を考えることになり、常識的にありえない音変化となります。そこでoh（「王」）の表記を発音表記の工夫と考えたように「叱分」（spun）→「分叱」（psun）の変化は表記上の変化であって発音は全く同じ（全同）かよく似ていた（相同）とみるのがよいでしょう。しかし発音が全同か相同なのにspunとpsunのように全く違った表記がなされていることは大いに疑問になるところです。そこでこの疑問を解くために日本語の例を考えることにします。

現在の私たちは雀の鳴き声は「チュンチュン」、鼠の鳴き声は「チュウチュウ」と思いそのように表記するのが習わしです。たしかに耳を凝らすと雀と鼠は「チュンチュン」「チュウチュウ」と鳴いているのですが、「日本人は、ずっと昔から、ネズミの声とスズメの声を、同じことばでうつしてきたふしがあ」り、江戸時代人はその鳴きざまを「ジジめく」（ともに山口　1989：118－120）と表現しています。また「すずめしうしう」（亀井　昭和59:447－464）で考察がなされているように江戸時代以前には雀の鳴き声は「しうしう」と表記されています。そしてより古い時代の上代には「庭」（記雄略)）や「」(和名抄)」(ともに[上代語辞典編委編　1967](http://ichhan.sakura.ne.jp/reference/ref.jyoudaigojiten1967.html):389）の表記がみられます。そこで「雀」の語（注28）は鳴き声の「す」を重複した「すす」（擬声語：「鈴」と同源）と鳥類を指示する接尾語「め」からできた言葉とみることができ、「須須」→「しうしう」→「ちうちう」→「ちゅんちゅん」のように表記が変わったとみることができるでしょう。また室町時代頃の「し」がtsiのような音であったとみられているので、これらの表記の変遷から「雀」の鳴き声はsiusiu（虞韻siu）→tsiutsiu→tʃiutʃiu→tʃuntʃunのように変わったと考えられます。しかし雀の鳴き声は古今東西同じであり、時代によって変わるとはとても思えません。そこで雀の鳴き声は時代による変化はないけれどもその表記は上のように変化したと考えるのがよいでしょう。しかしそう考えたとしても各時代における表記の違いはあまりにも大きく、その違いはなぜ起こったのかという疑問がでてくるでしょう。そこで上の表記の変化の謎を解くために「須」（歯頭音精組心母）の子音をs（歯茎摩擦音/s/）とする中国語中古音の通説を破棄し、かわりに歯頭音精組精母ts（歯茎破擦音/ts/）にまぎれるようなtsに似た音Sと考えます。そう考えると上代の雀の鳴き声はSiuɴ（撥音ɴ：口蓋垂鼻音ついては今回は省略）と考えることができるでしょう。そしてこのSiuɴの音を奈良時代、室町時代、江戸時代、そして現代人の我々はそれぞれSiuɴSiuɴ、tsiutsiu、tʃiutʃiu、tʃuntʃunのように聞きなして「須須」「しうしう」「ちうちう」「ちゅんちゅん」のように表記したと考えることで「雀の鳴き声」の表記における矛盾は解消するでしょう。もちろんSiuɴSiuɴの鳴き声をなぜ「しうしう」「ちうちう」「ちゅんちゅん」のように表記したのかという疑問は依然残りますが。

さてここまで同じ発音（鳴き声）が各時代により違った表記でなされてきたことをみてきました。そこで「叱分」と「分叱」と二つの表記がみられる問題を考えるために「軍吏（軍吏は）」（『大明律』、小倉　昭和49：325）について考えます。

「段」については次のような用例が見られます（同書：325，455，325）。

「「段」は音단で、「は」の義に用ひられたもの（略）」

「凡て國家律令（律令は）（略）（改行）〔註〕「叱」はs（ㅅ）音を示したもので、「叱段」はᄯᅡᆫと讀むべく、「段」（No.47）と同一義である。」

「願ᄒᆞᆫ내生生애…〔月印千江之曲〕」（「願はくは…」の意）

「段」（단tan）は中古音duan（舌頭音全濁定母）なので後に濃音とされ各自並書であらわされるttanと同じ発音とみられ、上の用例から「段」と단そしてᄯᅡᆫは同一のものとみることができるでしょう。さきほど雀の鳴き声と表記の齟齬は雀の鳴き声は古今同じであるけれど時代によってその表記は違ったと考えることでその矛盾を解消できることをみました。そこでこのアイディアをここでも援用すると「段」（단）と「叱段」（ᄯᅡᆫ）の発音は同じであったけれどその表記にはㅅが添加されたと考えるとその表記の変化をうまく説明できるでしょう。そしてこのような考えを推し進めるために属格まがいのㅅを考え、そのㅅをｓもどきの音の***s***と考えます。するとtʌn（단「段」）→***s***tan（「叱段」）→stan→ʔtan（濃音）のような変化を考えることができるでしょう。さてここまで考えてきた発音と表記の関係を「叱分」と「分叱」に適用し、「叱分」と「分叱」の表記の新古と現代語の뿐（ppun）との関係を考えてみます。すると***s***pun（「叱分」）→p***s***un（「」や「分叱」）→pun（「分」）→ʔpun（뿐）のような変化を考えることができるでしょう。そこでこの変化から***s***pとp***s***はpと全同か相同と考えられるので、***s***pとp***s***をpまがいの***p1***・***p2***と仮に考えると上の変化は***p1***un→***p2***un→pun→ʔpunとあらわすことができます。そこでこのような関係を第10節で考えた「女兒」の表記の変化にも適用すると、***p***tʌr（=p***s***tʌr：「寳妲」）→***s***tʌr（「スタリ」）→stʌｒ→ttar（現代語：ʔtar）と考えることができるでしょう。つまりpまがいの***p***（=p***s***）とsもどきの***s***を考えることによって中世以後にみられるpt→stの不思議な表記の変化をpまがいの***p***がsもどきの***s***に、つまりp***s***が***s***に変化したと考えることによって「女兒」の表記の変化を常識的にうまく説明できるでしょう。
　ここで郷歌にみられる「叱」について少しみておきます（福井　2013：182）。

「由来は不明であるがsの音を表す。郷歌，吏読，口訣，固有名表記などに幅広く用いられる。この字の本来の字音（広韻 昌栗切，中世語cɨr）からはsを表すことが説明しがたい（略）（改行）文法的形態素としては，属格のsを表すのが代表的用法であるが，その他に自立語の語形の一部，特に漢字音では表記できない音節末のsや，sk，st，spといった複子音に含まれるsを表すのにも使われる。（以下、略）。」

「叱」を属格のsから複子音へ、そして濃音への変化をみるのが通説ですが、ㅅの機能を過去に遡ってS（原機能）→***s***（sもどき）→s（属格、濃音化記号）のように考えるべきでしょう。つまり郷歌の「叱」を通説の歯茎摩擦音sと考えるのではなくsもどきの***s***と考え、その***s***が属格のsに、さらには痕跡としてみられる濃音化記号sへと変化したと考えることで、「叱」の本来の字音（中世語cɨr）と「間のs」のㅅとの関係もみえてくることでしょう。

さてここまで言葉遊びのような変化を考えてきましたが、p***s***が***s***に変化したのはなぜかという重要な疑問が残ります。この問題は次回の更新で考えることにして、次節では喉頭化音（Cʔ）と有気音（Ch）との関係を考えることにします。

1. 喉頭化音（C**ʔ**）と有気音（C**h**）の関係を考える

第８節で疑問法語尾rska（-ㄹᄭᅡ）を濃音ではなくs複子音と考え、そのs複子音が現在までに濃音（sk→ ʔk）になったと考えましたが、この濃音化の謎を解く鍵が琉球方言にあります。そこでこれから奄美方言や与那国方言の喉頭化音についてみてみることにします。
　琉球方言では「舌」「人間」は次のようになっています。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 「舌」 | 「人間」 |
| 奄美市佐仁方言 | suba | tʃʔu |
| 那覇市首里方言 | şiba (普通語) | Qcu① |
| 宮古島市下里方言 | sɨda | psɨtu<ヒト> |
| 八重山波照間方言 | sɨta | pɨtu |
| 八重山与那国方言 | **タ**t’a（=tʔa） | **トゥ**tʔu（=tʔu） |

＊佐仁方言：中松　昭和62：307,315。「人間」にはniŋgiɴもあり。
＊首里方言：国立国語研究所編　昭和51：444/463。慣用句などではsica（同書：464）。①：下降型アクセント（首里方言）。
＊下里方言：中松　昭和62：97,105。
＊波照間方言：中松　昭和62：187,196。
＊与那国方言：中松　昭和62：148，202。太字の**タ**・**トゥ**は喉頭化音（tʔa，tʔu）（注29）。

また八重山諸島の各方言の「舌」は次のようになっています（それぞれ中本　1976：231,222,230,234,233,236）。

小浜，石垣方言：sïta
波照間島方言：sïta

竹富島方言：ʃita

西表島祖納方言：ʃita

黒島方言：ʃiba

＊ï：ïの無声化音（ïで代用）。
＊上例は橋本萬太郎　1981：357でも紹介されていますが、それらの語例は宮良　昭和56：275から引用したと思われます。

　上の琉球各方言や八重山諸島の各方言と与那国方言との比較から与那国方言の「人」「舌」はpito→tʃʔu、sita→tʔaのような喉頭音化を起こしたと考えることができます。ところで沖縄北部の今帰仁方言でも喉頭化音kʔがみられ、このkʔは語頭で有気音khと次のように対立します（仲宗根　1987：115－6）。

「語頭の「コ」から来た「ク」と、「ク」から来た「く」ははっきり有気音と無気音で区別される。ただし母音が無声化するときは、「ク」から来た「く」は有気音になる。（例はのちほど：改行）ケ・キに対応する音はおのおのキ（き）・ちである。（例はのちほど、略、改行）羽地川上・我部祖河などでは、語頭では「ケ」から来た「キ」と「キ」から来た「き」を有気音と無気音で区別している。
　＊上の「ク」「キ」は有気音のkhu/khi、「く」「き」は無気音のkʔu/kʔi。

上の語頭におけるkʔとkhの対立は喜界島方言を母語とする岩倉氏が昭和初期にはじめて報告された（注30）もので記憶に価するものです。喜界島方言と今帰仁方言を比較しておきます（岩倉　昭和16:(2)，仲宗根　1987：115－6）。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 喉頭化音（kʔ） | 有気音（kh） |
|  | 本来の「き」 | 本来の「く」 | 轉来の「き」 | 轉来の「く」 |
| 喜界島方言 | ン（金）,ク（菊） | チ（口） | キン（劍） | クチ（） |
| 今帰仁方言 | ちヌ（着物：「衣」より） | くム（k’umu：雲） | キ（毛） | ク（k‘u：鳥籠） |
| 羽地A | きン（切る） | - | キン（蹴る） | - |

＊A：羽地：羽地川上・我部祖河など。

語頭における今帰仁方言のkʔ/khと本土方言の対応をまとめると次のようになります。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 喉頭化音 | 有気音 |
| 本土方言 | - | khi/khu | khe/kho |
| 今帰仁方言 | kʔi/kʔu | - | khi/khu |

＊本土方言の語頭キ・クは有気音（注31）。今帰仁方言のkʔi/kʔuは無気音、またケ・コから転来したkhi/khuは有気音。

ところで上のような対応がみられる本土方言の語頭のkhと今帰仁方言の語頭のkʔが同じなんらかの不明な音Xに遡ると考えると、原日本語XからX→kh（本土方言）、X→kʔ（今帰仁方言）のような変化を考えることができるでしょう。先にみたように与那国方言の2音節語「人」や「舌」がtʃʔuやtʔaのように1音節の喉頭化音に変化しているので、sita（「舌」）→sita（i：今はiの無声化音（iで代用）と考えておきます）→sta（s複子音）→tʔa（喉頭化音）のような変化を考えることができます。また本土方言のハ行頭子音はpV→ΦV→hV（今は通説にしたがい両唇摩擦音/Φ/）のように変化したとみられています。そこで本土方言と今帰仁方言の有気音をpVCV→pCV→hCV→ChVのような変化から発生したと考えます。すると喉頭化音の発生は（sVCV→）sCV、有気音の発生は（pVCV→）pCVからの変化と考えることができ、本土方言の有気音が今帰仁方言の喉頭化音に対応することからX→sCV→CʔV(喉頭音化)、X→pCV→ChV(有気音化)のような変化を想定することができるでしょう。

上の考えをまとめると次のようになります。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 変化 | 本土方言 | 今帰仁方言 | 与那国方言 |
| 喉頭化音 | XCV→sCV→ | - | CʔV1 | sita→ʔta（「舌」）, pito→tʃʔu（「人」） |
| 有気音化 | XCV→pCV→hCV→ | ChV | ChV2 | ChV |

＊V1：キ・ク。V2：ケ・コから転来したキ・ク。与那国方言は3母音（a,i,u）。V：母音。X：子音（p,t,k）。

＊語頭の喉頭化音と有気音化はとりあえず上のように（例語の変化も）考えておきます。詳しい考察は次回の更新にします。

ところで第10節で中期朝鮮語の語頭子音pt/pcが陸地方言でʔt/ʔc、また済州島方言でth/chとそれぞれ濃音化・激音化していることをみました。そこで上の日本語方言の喉頭音化・有気音化と韓国語の濃音化・激音化を比較すると次のようになるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 日本語 | 喉頭音化 | 有気音化 |
| X→sC→Cʔ | X→pC→hC→Ch |
| 韓国語 | pt/pc→ʔt/ʔc | pt/pc→ht/hc→th/ch |
| 濃音化（陸地方言） | 有気音化（済州島方言） |

ところでptが陸地方言で濃音化し、済州島方言で有気音化していているので、陸地方言の変化の途中にxt/xcのような複子音を考えてみます。そのように考えるとpt→xt→ʔt、またpt→ht→thのような変化を考えることができ、陸地方言で濃音化し、済州島方言で有気音化したことをうまく説明できるでしょう。そして前節でsもどきの***s***を考えることによって中世以後にみられるpt（例：「寳妲」）→st（例：「スタリ」）の不思議な変化をp***s***t→***s***t→st（複子音）→ʔt（濃音）の変化として解釈できることをみました。そこで陸地方言のpt（→xt）→ʔtの変化のなかのxをsもどきの***s***、またp***s***をpもどきの***p***と考えれば陸地方言は（pt→）p***s***t→***s***t→st→ʔt、済州島方言はpt→ht→th（有気音化）のような変化として説明できるでしょう。

ここでここまでの考えをまとめると、次のようになるでしょう。

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
|  | 日本語（今帰仁方言） | 韓国語 |
| s | 喉頭音化 | X→sC→ʔC | sk/st/sp→ʔk/ʔt/ʔp | 濃音化 | 陸地方言/済州島方言 |
| ps/psk/pst→ʔs/ʔk/ʔt | 濃音化 | 陸地方言/済州島方言 |
| p***s***t/p***s***c→***s***t/***s***c→st/sc→ʔt/ʔc | 濃音化 | 済州島方言 |
| h | 有気音化 | X→pC→hC→Ch | pt/pc→ht/hc→th/ch | 激音化 | 済州島方言 |

＊p***s***t/ptの違いなど考えるべき多くのことは次回更新で考えることにして、今はこのように考えておきます。

1. 並書表記ㆅ（hh）の後裔であるᄻ（sh）を考える

ここでは17世紀文献にあらわれた並書表記ㆅ（hh）の後裔であるᄻ（sh）について考えることにします。
　制字解において各自並書表記ㆅ（hh）の特殊性については次のような記述があります（趙　2010：40）。

「全清の字母を並べて書いて全濁とするのは、全清の音声が凝固して全濁になるからである。唯一、喉音だけ次清（ㅎ）が全濁（ㆅ）となるのは、おそらくㆆの音声が深いがために凝固しないのだろう。ㅎはㆆに比べて音声が浅いので、凝固して全濁になるのである。」

上の各自並書hhは次のように変化しています（李　1975：134）。

「各自並書は『円覚経諺解』から全面的に廃止された。こうしてssɨ-（書く）、sso-（射る）、hhyə-（引く）も、各々sɨ-，so-，hyə-と表記されるに至った。即ち語頭における平音と濃音の対立が、表記上無視されるという結果を生んだのである。この不合理が是正され、十六世紀に入って語頭音表記のssは復活されたが、hhは復活し得なかった。（hhについてはp.144-5原注）」

たとえばhhyə-（引く）はその後次のような変化をしています（李　1975：220，221－3）。

「十五世紀中葉にhhyə-（引く）と表記された動詞語幹は、各自並書が廃止された『円覚経諺解』以後の文献にはhyə-と表記され、これがそのまま十六世紀末まで続いていたのである。（p.134原注）ところが17世紀になってshという興味深い表記が現われるようになったのである。例。hwarʌr shyə（新続三・烈女図　四－七〇、弓をひいて）（以下、２例省略）。」
「この濃音（筆者注：ᄻ（sh））は十七世後半にkh（ㅋ）に合流してしまったものと推定される。（中略）『老乞大諺解』（下五三）にこの語がkhyə-と表記された例が見える。yərə mosipɨi sar nakɨnai khyə ora（多くの紵布を買う旅人を引っぱって来い）。」

　上の引用からわかるようにhhyə-（引く）は『円覚経諺解』以後にはhyə-、その後17世紀になってshyəとなり、十七世後半にkhyəに変化しています。そこで疑問がでてきます。先に「ssは復活されたが、hhは復活し得なかった」という記述を紹介しましたが、もしssがもとssで、その後濃音として復活したのにhはhhとして復活せずにsh→khと有気音化した理由は何なのでしょうか。この変化の違いを考えることにします。
　近代の濃音表記については次のような記述があります（李　1975：220）。

「十九世紀になって濃音表記はすべて、「濃音記号s」（toin・si・os）で統一される傾向がはっきりしてきた。sk,st,sp,scなど。しかしsの濃音はssではなくpsで通用した」

上の記述からごく近代になって濃音表記は濃音記号sで統一されるようになったことがわかります。そしてこの記述は中世の複子音skなどが近代になって濃音（=ʔk）へと変化し、濃音化記号sとして固定化したことを示していると考えられます。そこでもしssの前項のsが濃音化のsであればsの濃音はssで表記されたと思われますが、「sの濃音はssではなくpsで通用し」ていたのでssの前項のsは濃音化のsではなかったとみられます。そこで中世にみられた並書表記ssは濃音を表記したのではなくskと同じようなs複子音だったと考えてみます。するとhhの後裔であるshは濃音化せずにその後khと有気音化しているので、並書表記hhがshとして復活したshの前項のsは有気音化のsで濃音化のsではなかったと考えられます。そこでこの後の説明をわかりやすくするために濃音化を起こしたssと有気音化を起こしたshをs1sとs2hのようにかき分けます。するとs1sのs1は濃音化を起こしたs、s2hのs2は有気音化を起こしたsであり、その変化はs1s→ ʔs、s2h→khとなるでしょう。そこでこのs1sとs2hの音節頭のs1とs2の違いをs1はsもどきの***s***、またs2はsもどきの***s***から変化したhに似たxと考えてみます。また上の記述にある「sの濃音はssではなくpsで通用した」ことから前節の考察結果である濃音化の変化（p***s***t→***s***t→st→ʔt）をsもどきの***s***に適応してみます。このように考えるとssとして復活したs1sとhhとして復活せず17世紀になって現れたs2hとの違いをp***s***s→***s***s→s1s→ʔs（濃音）とp***s***s→***s***h→xh→kh（有気音）の違いとして説明できるでしょう。そしてこの濃音化と有気音化の違いは***s***sがs1sに、また***s***h（=s2h）がxhにかわることで起こるので***s***がs1とs2（=x）に分化しないあいだ、つまり17世紀にshが発生する前まではssは濃音化していなかったと考えることができるでしょう。そして***s***sからss（濃音）へ変化するにはある程度の時間が必要とされると考えられるので、濃音化は通説で考えられているよりもっと現代に近い時代に起こったと考えることができるでしょう。

上の考えを疑問法語尾のrskaと「引く」のhhyə-の例でみておきます。

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 十五世紀中葉 | 16世紀末まで | 17世紀 | 現在 |
|  | 『月印釋譜』 | 『法華經諺解』 | 『円覚経』以後 | 『捷解新語』 | 「新続三」以後 |
| 表記 | ㅭ‖가 | ㄹ‖까 | ㄹ‖가 | ㄹ‖ᄭᅡ | ㄹ‖까 |
| 翻字 | rʔka | rkka | rka | rska | rkka |
| （hyə） | hhyə | hyə | shyə | khyə |

＊『円覚経』：『円覚経諺解』。新続三：『東國新續三綱行實圖』（諺解）1617年。
＊khyə：「〜khyə　ora（〜引っぱって来い）」(『老乞大諺解』)（李　1975：221－2）。

＊（　）のhyəは推定。

上表のように疑問法語尾rkkaは*s*ka→ska→ʔka（濃音化）、また中世のhhyə-（引く）は*s*hyə→xhyə→khyə（有気音化）のように変化したと考えることができます。ところで中国語音韻学では牙音（通説のk類）と喉音（通説のh類）は牙喉音と一括されることがあり、牙音と喉音はよく似た近い音と認識されています。そこで牙音kと喉音hの相通という古い考えを援用して15世紀中葉のhhyə-のhはh（声門摩擦音/h/）ではなくkまがいの***k***と考えます。そう考えると十五世紀中葉のhhは***kk***、17世紀のshは***sk***、「新続三」以後はkhと考えることができ、その変化を***kk***yə→***k***yə→***sk***yə→h***k***yə→khyəと考えることができるでしょう。
　わかりやすいようにここで上の変化をまとめておきます。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
|  | 十五世紀中葉以降 | 17世紀 | 現在 |
| 発音 | rʔ-ka**----------**→ | r-ʔka-----------→ | rʔka（濃音化） |
| 表記 | rkka---→rka---→ | r***s***ka---→rska---→ | rkka |
| hhyə---→hyə---→ | shyə------------→ | khyə |
| 発音 | ***kk***yə**---**→***k***yə---→ | ***sk***yə（→h***k***yə）-→ | khyə（激音化） |

＊今は（　）内のhkyəには通説のh（声門摩擦音）を考え、***s***→h、h***k***→khの有気音化を考えておきます。次回の更新で詳しく考えます。

このように各自並書表記hhがshから現在のkhへ変化したことをうまく説明できると思われるのですが、***s***→hの変化やkもどきの***k***など多くの疑問が残ります。これらの疑問については次回の更新で考えることにして、次節では各自並書についてもう一度考えることにします。

1. 各自並書について再考する

前節で疑問法語尾rkkaはrkk（各自並書）→rk（単書）→r*s*k（sもどき）→rsk（s複子音）→rkk（濃音）のように変化したと考えました。そこで中世の各自並書についてもう一度考えることにします。
　中世の各自並書は『訓民正音』（解例本）の制字解において次のように定義されています（趙　2010：35,40）。

「ㄱ、ㄷ、ㅂ、ㅈ、ㅅ、ㆆは全清である。（次清は略）ㄲ、ㄸ、ㅃ、ㅉ、ㅆ、ㆅは全濁である。（以下、略）」

「全清の字母を並べて書いて全濁とするのは、全清の音声が凝固して全濁になるからである。（以下、喉音のみ次清（ㅎ）が全濁（ㆅ）になることの説明は省略）」

上の規定から中世の各自並書表記CCは中古音の全濁声に対応し、その特徴は「凝る」とされていて全清Cの凝固したものです。また『東国正韻序』において「韓国の語音に於いても，その清濁の区別は中国の（字音）と異なる所がないにも拘らず，韓国の字音においてのみ濁声がないが，どうしてこのようなことがあり得るだろうか」（姜　1993：200）と中国中古音との違いも述べられています。そこで中古音の全濁声を有声音とみる通説を援用し『訓民正音』（解例本）で規定されている各自並書の音を「今日の濃音に該当する音」（同書：82）とはみないで、清濁の区別があっても濁声はないとの上の記述から有声音もどきの音とみてみます。ところで韓国語の濃音は「閉鎖の開放の直前に声門の閉鎖ないし喉頭の緊張を伴う」（福井　2013：35）特徴を持つ音として知られるのですが、「或る人はtoin-siotを以て濁音なりとし、或は淸音と濁音との中間音であるなどと言つて居るのは、素人の言ひ方ではあるが、確かに事實を物語つて居る」（小倉　昭和50：174）との観察があります。この観察から『訓民正音』（解例本）の各自並書の音を有声音もどきの音とみれば現在の濃音と同じ音相をもっていたとみることができるでしょう。つまり中世に有声音もどきの音とみられた各自並書音と現在の喉頭化音である濃音とのあいだには違いがなかった（全同）とみることができます。第８節で疑問法語尾rkkについて考察したなかでrkk（中世の各自並書）→rkk（現在の濃音）のあいだの音をとりあえず同じ（全同）としておいたのはこのことを指しています。しかしここで疑問があります。中世と現代による音相の観察の違いが中世の各自並書表記と現代の濃音表記の違いをもたらしたという説明は納得がいくのですが、ではなぜ現在の濃音は有声音もどきの音ではなく濃音として学習されるのでしょうか。現代の濃音は現在においても有声音もどきの音（小倉氏によれば濁音、あるいは清音と濁音のあいだの音）であるのも事実です。そこでもしこの中世音と現在音が全同であれば現在もその伝統（子・孫への伝承）として有声音もどきの音として学習され、濃音は副次的な音相とされるのではないでしょうか。このように有声音もどきの音から濃音へと学習の観点が変わったのは中世音と現在音が全同ではなかった、相同であったためと考えられるでしょう。では中世音と現在音が相同であったとして各自並書で表記された音はどのように現在の濃音に変化したのでしょうか。この難しい問題は次回の更新で詳しく考察しますが、ここではこの問題を解くためのヒントを紹介しておきます。そのヒントはあまり知られていない奄美喜界島方言のなかにあります。
　喜界島方言には濃音と同じ喉頭化無気音（Cʔ）があり、その音相については次のような報告があります（伊波　1974：27）。

「ʔt（或は’t）の破裂が母音aの震動と同時に起つて、正に両者（筆者注：無気喉頭音が濁音と有気音）の中間の状態にあることが知れる。聞いた感じが稍、濁音に近いのは、専らその為である。」

このような喜界島方言のtʔa（喉頭閉鎖音）の音相は先にみた朝鮮語のʔta（濃音）と同じとみることができるでしょう。そしてその似かよりは音声機器カイモグラフにみられる波形によってもその同一性が確認できます（小倉　昭和50：174，伊波　1974：27）。また第14節でみたように喉頭化音は八重山与那国方言でもみられ、sta→tʔa（「舌」）のような変化によって発生したと考えられます。そこで前々節でp***s***t→***s***t→st→ʔtの変化を仮定したので、疑問法語尾rkkaの変化をrʔ ka→X（有声音もどき）→r***s***ka→rska→rʔkaのように考えることができるでしょう。

ここで有声音もどきの音がどんな音であったかを考えるために日本語の連濁という音韻変化を考えます。この連濁現象は日本人ならだれもが知っていて無意識に使うことができる音韻規則です。そしてポリワーノフは「対をなす有声子音の起源は「鼻音+無声子音」という結合と関連している」(村山訳　昭和51:111)と世界ではじめて日本語の連濁について言及しています。
　ポリワーノフの先見的なアイディアは次のように記述できるでしょう。

（CVNCV→）CVNCV→CVN***C***V→CV***C***V

＊C：無声子音。***C***（斜体太字のC）：有声子音。N：鼻音。N：鼻濁音。

　　＊例：yama（山）+N+tori（鳥）→yamaNdori→yamadori（やまどり）

ところで康遇聖が作成したと考えられる『捷解新語』（1676刊）には日本語の語頭の濁音を表わすために鼻音を添加した次のような表記（一部のみ引用）がみられます（福井　2013：214-5）。

「（11.2）はん/반pan(番)　4:27b,28a,29a,30a

さうこん/ᅀᅩ우ᇰ곤zo’uŋkon(雑言)　2:14a

（11.3）きよい/ᅁᅭ이ŋkyo’i(御意) 　2:1b,2a,7a,3:1b,5a,8a
はん/ᄜᅡᆫmpan(晩) 　1：20b　等，多数
（11.4）きやうき/교우ᇰ기kjo’uŋki(行儀)　5:25b」

＊語頭濁音の表記とアクセントの関係：「濁音表記に関していえば，鼻音を伴うものはほぼつねに高起式になり，逆にアクセントの側から見ると，低起式はほぼつねに平音の表記となる」（福井　2013：222）（注32）。

このように『捷解新語』では語頭の濁音（今は語中を除く）を表わすために種々の表記が工夫されています。そのなかで11.3の「きよい」(御意)の例でわかるように現在濁音となっている語頭が鼻濁音ŋkで表記されています（注33）。また「はん/반pan(番)」と「はん/ᄜᅡᆫmpan(晩)」の語例から「ㅂで濁音を表せるはずなのに，わざわざ鼻音を追加した表記（ᄜ（mp））も現れ」（福井　2013：214-5）ているので、江戸時代初期の日本語の語頭にもある種のɴ（入りわたり鼻音ŋ/n/m）があったと考えることができるでしょう。そしてこの現象は同時代の宣教師ロドリゲスの都ことばに鼻濁音があったという記述ともよくあい、中世日本語の語頭子音はまだ濁音になりきっていない鼻濁音の状態で、その後現在にいたるあいだに濁音になったと考えることができるでしょう。

ここで日本語語頭の清濁音と『捷解新語』の清音・鼻濁音の表記の関係をまとめると次のようになるでしょう（福井　2013：224）。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | カ/ガ行 | タ/ダ行 | サ/ザ行 | パ/バ行 | アクセント |
| 清音 | ㄱ（k） | k | ㄷ（t） | t | ㅅ（s） | s | ㅂ（p） | h | 低起式 |
| 濁音 | ㅇㄱ（ŋk） | g | ㅦ（nt） | d | ㅿ（z） | dz | ㅮ（mp） | b | 高起式 |

＊各列の右側のローマ字は現代日本語の音価（s/hは古代ts/pとみられています）(亀井　昭和61：99)。語頭はg。語中はgまたはŋなど。

＊現代韓国語のアクセント（低起式・高起式、但し、サ/ザ行は除く）は福井　2013：224。ㅅ/ㅿは通説でs/z。

＊『捷解新語』の並書表記には促音を表す場合と単なる清音を表す場合の2通りがあるが、（略）「てんき」，「ふそく」，「まんぞく」，「みやこ」等高起式のものが目につく」（福井　2013：225）。

ところで韓国語の語頭については次のような観察があります（福井　2013：158）。

「現代韓国語においては，しばしば語頭の鼻音の出わたりが非鼻音化して[nd][mb]などと発音され，日本語の母語話者には濁音のように聞こえることがあるが，（略）おそらく日本の平安時代頃にも語頭の鼻音における出わたりの非鼻音化が存在していたものと考えられるが，（以下、略）」

ところで「少なくとも高麗時代までさかのぼっても，語頭において有声/無声の区別は中世語と同様に存在しなかったと考えられる」（同書同ページ）のですが、すると少し疑問がわいてきます。なぜなら古代朝鮮語の語頭に濁音（有声音）が存在しなかったとすれば現代韓国語の語頭にndやmbなどの鼻音が観察されるのはなぜでしょうか。無から有が生まれると考えるのは常識に反するので古代朝鮮語の語頭にもɴ（日本語の入りわたり鼻音に相当）があったと考え、その語頭のnd/mbはその後も変化せず現代韓国語に至ったと考えてみます。また世界中の言語をみても語頭にŋがみられる言語はほとんど存在しないという事実からm→n→ŋの変化を仮定します。すると古代朝鮮語から現在韓国語まで語頭での入りわたり鼻音ɴ はŋに変化することがなかったため現代韓国語には結果として語頭のŋgはみられないとみることができるでしょう。また古代日本語の語頭にあった入りわたり鼻音m/nは現在では濁音（有声音b/d）になり、またn→ŋの変化がなかったために語頭のŋが存在しないと考えることができるでしょう。
　そこでこの考えをまとめると次のようになるでしょう。

|  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- |
| 語頭 | 古代 | 中世 | 現代 |
| 日本語 | ɴC | ɴ**C** | **C** |
| 朝鮮語（韓国語） | ɴC | ɴ**C** | C/ɴ**C** |

＊現代韓国語の語頭は清音Cで、一部がɴ**C**。中期朝鮮語固有の語頭ɴC（制字解の「凝固した」有声音もどきの音）はss/hhのみ。語中では有声化と濃音化が同時には起こらない規則については次回の更新で考えます。
＊現代の固有日本語の多くの方言に「ガニ」（「蟹」）（亀井　昭和59：395））が見られます。
＊戦前韓国語に借用された「下駄」（ゲタ）が「ケダ」（「게다」keita）のように発音されることは現代韓国語の語頭は無声音（清音）、語中では有声音（濁音）となる音韻規則があり、現代日本語の清濁のあらわれと違うためと説明することができるでしょう。

ここまでの考察から康遇聖は中世日本語の入りわたり鼻音をもつ語頭濁音ɴ**C**を聞くことができ、耳で聞いた音をできるだけ正確に表現しようとしたために色々な表記がみられると考えることができるでしょう。また中期朝鮮語の語頭がɴC（鼻濁音：有声音もどきの音）であったと考えることで制字解の「全清の音声が凝固して全濁になる」（各自並書表記）という規定や『東国正韻序』の「韓国の字音においてのみ濁声がない」という記述をうまく解釈できるでしょう。

**〔おわりに〕**

　中期朝鮮語の音価の問題を考えてあっというまに約１年が過ぎました。次回の更新で考えます、として残した初声字（終声字）の問題は多くあります。それらの残された初声字（終声字）の問題は次回の更新に、中声字（母音）の問題は次々回の更新で考えたいと思います。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2015.11．7　　　　　ichhan

【注】

1. この『訓民正音』は「全編が漢文で書かれており、「解例」と呼ばれる解説と用例が附されていることから、俗に「解例本」と称され」（趙　2010:192）、その「解例本」の例義を諺文訳したものは「諺解本」といわれます。
2. 「中国語の音節構造は、声母(頭子音)、韻母(介音＋主母音＋韻尾)、声調の三類五要素に分析され」、また「声母は主に発音部位の相違によって、唇・舌（舌頭・舌上）・牙・歯（歯頭・歯上・正歯）・喉の「五音」（半舌・半歯を分出させれば「七音」）に分類され、それぞれは発音方法の相違によって、全清・次清・全濁・次濁に細分され」（ともに森博達　1991：284）ます。声調は平・上・去・入の四声、また通説では全清は無声無気音、次清は無声有気音、全濁は有声音、次濁は鼻音等とされています。
3. 『訓民正音』の「合字解」に「字の左に点を一つ加えると去声を表し、点二つは上声を表し、点のないものは平声を表」し、「入声は「無定」」（ともに趙2010:96）とされ、それらの点（無点も）を傍点と言います。声調は「去声とは高調の拍、平声とは低調の拍、上声とは低調と高調の複合拍を指す。入声は音の高低とは関係なく、[-p][-k]など閉鎖音で終わる拍を指す」（同書:23）。声調については次回考察します。
4. 連書と並書：ㅸ（β）のように１つの音の表記に2つの字（ㅂとㅇ）を縦に書く表記は連書、子音字を横に並べる表記は並書とよばれ、その並書にはㄲ（kk）のように同じ子音字を並べる各自並書とㅴ（psk）のように異なる子音字を並べる合用並書があります。
5. 尾崎氏のアイディアはL>ɫ>lですが、口蓋的l（[i]の音色をもつ）>軟口蓋的ɫ （[u]の音色をもつ）の変化（L>l>ɫ）を考えるべきでしょう。
6. 現在は「来母がr-で再構されるようになって、複声母再構の必要度は減少した。二等韻や三等韻の一部（重紐Bなど）に自動的に介母-r-が復元されるためである。（再構例などは省略）一等の「各」（中古見母）と「洛」（中古来母）のような例では、どうしても一方あるいは双方に複声母を考えざるをえない」（古屋　2010：22）という指摘にあるように来母をl-ではなくr-で再構するだけでは複声母の問題は解決しません。そこで「各」（見母）と「洛」（来母）の諧声現象を説明するために上古に複声母klが存在したと考える通説は破棄し、守温韻學残巻の記述「牙音　見君渓群來疑等字是也」を尊重し、X→k（「各」）、X→l（「洛」）→ɫ（大同の「路」）のように変化するlの先祖Ｘをみつけるのがよいでしょう。この考察は次回の更新で考えることにします。
7. 「『洪武正韻訳訓』（一六巻）は中国の『洪武正韻』に正音文字で音を付けたもので、（略）浩瀚なのでこれを抄約したのが『四声通攷』であったが、現在伝わらない。ただこの本を改修した崔世珍の『四声通解』（中宗一二年、1517）があり、その末尾に『四声通攷』の凡例が付載されて」（李　1975：126）います。その中の入声表記に対して「この訳訓の諸韻において，俗音終声は喉音全清音（字）であるㆆ[ʔ]で表わし，薬韻は唇軽音全清音（字）であるㅸ[f]で表わして，これを区別した」（姜　1993：225）との記述があります。
8. カイモグラフ（小泉　1982：70）より（ata→）atha（有気音）→atsa（破擦音）→asa（摩擦音）への変化を想定することができます（同書：97）。
9. 「「母」は「ハワ」から「ハハ」に先祖がえりをしたのか？」（<http://ichhan.sakura.ne.jp/rendaku/rendaku9.html#senzogaeri>）
10. 「促音便ってなに？」の「仮面をかぶった人物」のたとえ

<http://ichhan.sakura.ne.jp/rendaku/rendaku11.html#sokuonbin>

1. 中世の『中原音韻』（周徳清著1324年写定）では疑母は「一部を除いては消滅」（藤堂　1980：112）したとみられることから上古音に存在した疑母が現在にいたるあいだに消失したと考えるのが通説です。しかしこの通説は破棄して上古音にもまた中古音当時でさえŋは存在しなかったと考え、中世以後ŋは発生したと考える必要があります。詳しくはさらに後の更新（「かなはなぜ濁音専用の字体をもてなかったか」：亀井氏の論文のもじり）に書くことにします。
「日本語にはなぜ語頭のガ行鼻濁音がないのか」（http://ichhan.sakura.ne.jp/rendaku/rendaku7.html#ngagyou\_on）。
2. 「喩母3等は云母（于母：ゼロ子音ø）、喩母４等は以母（羊母：ｊ）」（森博達　1991:295）。
3. 福井氏の原注1に「服部氏は「ゆるやかな声たて」と訳している」（福井　2013:40）とあります。
＊「Sweetは呼氣段落の頭の母音における聲の始め方を‘gradual beginning’<ゆるやかな聲立て>と‘clear beginning’<はっきりした聲立て>とにわけ」（服部　1951:28）ています。

＊「服部四郎（1980）は日本語などにおいて母音ではじまる音節の初頭に喉音音素/’/を設けるが，それにも積極的な音声事実があるとしている」（福井　2013:40）のですが、この日本語の特殊音素/J/（J，R，N，Qの四つのうちのひとつ）についての問題点は城生（1977：116－120）、また服部の喉音音素/’/については服部（1960：290－1）。

1. 『雞林類事』に「男子曰了妲亦曰同婆記（改行）아ᄃᆞᆯ（’atʌｒ）（以下、略）」）（前田　昭和49：233）など多くの親族関係語の語頭「아」（’a）に対して「了」字（中古音来母効摂豪韻上声（條韻））で注しています。また「孫曰了寸了妲（改行）아ᄎᆞ나ᄃᆞᆯ（’achʌnatʌｒ）　これは鮮初に「甥」の義であるが此時は「孫」に用ゐたと見える。（以下、略）」（同書：234）。そこでrʔatʌｒ（了妲）→ʔatʌｒ→’atʌｒ（아ᄃᆞᆯ）の変化を考えると、『龍飛御天歌』の「孝道harʔ ’atʌｒ」の発音は「孝道har ʔatʌｒ」と考えられそうです。またㆆの使用は『訓民正音諺解』の「快쾡ㆆ字ᄍᆞᆼ」（姜　1993：153。kkwaiW ʔ ccʌW）や『月印釋譜』の「故—q（ ʔ） 字　「故の字」」（福井　2013：68。q= ʔ）にみられます。そこで小倉氏の次の記述が参考になるでしょう（小倉　昭和50：231‐2：語例は一部のみ）。
「（a）頭音：ᅙᅡᆨ（惡）－ʔak[ak]。ᅙᅳᆷ（音）－ʔŭm[ŭm]。（改行）

（b）中音：가ᇙ길（行路）－karʔ-kir[kalʔ-kir,kal-ʔkil] [註]古書に右（筆者注：左）の如き諺文の綴字法がある。（改行）兩音節間には、今日も喉頭閉鎖が行はれるやうに思ふ。（改行）

（c）末音：바ᇙ（八）－parʔ[pal]（朝鮮古字音）/ᅀᅵᇙ（入）－jiʔ（緝韻）（支那字音）。」
「中世韓国語においては独立した語頭子音として用いられたことがなく、東国正韻式漢字音においてのみ一つの語頭子音として認めた。例：「音 ʔɨm」」（姜1993:145）。

1. 「兪昌均（1994：806）は「沙矣」の「矣」の部分を中世語morɣaiの語形の一部と見るのではなく，処格助詞として（以下、方言形morgɛについては略）」（福井　2013：188）みています。また故小倉氏は「沙矣」もmorai（「沙矣」）+ei（処格助詞）」（小倉　昭和46：227）とみています。
2. サンスクリットの「気音hの正確な音価は明らかでないが，古代の音声学書は有声と教えている。一般に，語末にのみあらわれるḥ（visarga）は無声である（亀井ほか　1989：127）。
「「shad(l)の前のnga字にのみtsheg( )を打つ規則」を考える-チベット語の綴りを考える(その１)」の「４．サンスクリット転写用の鼻音・気音・長音符号を考える」をみてください。（http://ichhan.sakura.ne.jp/cht/tsheg.html）
3. 「濃音のs」（된시옷toin si ’os）については小倉（昭和49：555－571）に詳しい。
4. 「濁声は各自並書で表記したので、濃音は当然各自並書で表記したであろう」し、合用並書sk,st,spについては「15世紀中葉にこれはすでに実際上すでに「濃音記号s」であったものと信じられる」（ともに李　1975：143,4）とする考え方があります。
5. 「ᄢᅳᆯ（pskɨr）〜ᄭᅳᆯ（skɨr）　「鑿(のみ)」」（改行）これに対して同じ3子音からなる複子音でもpst-の方はより後まで保たれており，15世紀にはこのような変化は見られない」（福井　2013：194）。
6. 「中世にstを有していた唯一の語幹mast-（引き受ける）は、近代語になってmath-に変った。（例以下は省略）」（李　1975：236）。mast→maht→mathのような変化を考えることができるでしょう。
7. 中世以降の並書表記の変遷（李　1975：219－220）について：「中世文献にはㅺ（sk）、ㅼ（st）、ㅽ（sp）・ㅳ（pt）、ㅄ（ps）、ㅶ（pc）、ㅷ（pth）・ㅴ（psk）、ㅵ（pst）の三種の合用並書が存在したが、17世紀になればpsk，pst等が消滅の運命をたどるようになった。特に17世紀初にpkという並書がpskの新しい異体として登場した（略）従ってpskの異体としては、十五、十六世紀以来のskと新しいpkの共存が結果的に生じたことになる。（例は省略）そしてpstに対するptもこの時に登場した。（例は省略）一方stとpt、psとssの表記がよく混同した。（例は省略）十七世紀に芽生えたこの混同は十八世紀に至って極めて甚しかった。（略）そこへ各自並書が一部復活して使用された例があるので、事実上同じ濃音が三重の表記をもっていたと言い得るのである（sp-/pp-の例は省略）。そうして十九世紀になって濃音表記はすべて、「濃音記号s」（toin・si・os）で統一される傾向がはっきりしてきた。sk,st,sp,scなど。しかしsの濃音はssではなくpsで通用した。」
8. 金東昭（2003：270）の注57によれば、ssaho-（싸호-）はsaho-（사호-）よりも古い文献（『圓覺經（諺解）』以前）にみえるそうです。また「뒤>ᄯᅱ/ᄠᅱ（茅）」（同書：173）のようにp音が添加された並書表記も存在します。
9. 「酉の刻」（낡+때）は「現代語では「낡때」とは言わず、漢字語で「유시（酉時）」と言う」（趙2010:95）。福井氏の考えは福井2013：76。
10. 「は目的格を表はす助詞（一部略）。は吏讀の上では種々に用ひられるが、此處では랑と讀み、「肹良」二字を合して「乙良」と同様을난と讀み、「をば」の意味に用ひられたのである。（以下、略）」（小倉　昭和49：216）。「「乙良」は을안と讀み、「は」・「ぞ」の義である」（同書：427）。「乙」と「肹」は「この2つは対格を表すのに用いられる。細部を別にすれば，中世語の-ɨrに該当することは間違いない」（福井　2013：184）と考えられています。「肹」は「肸の俗字とされ,広韻では羲乙切,許訖切（又許乙切）,中世語の漢字音ではhɨrまたはhirであり、（中略）末尾にhをもつ形態素の対格表記」（同書：184）とみられそうです。しかし語末がh、その他の子音、母音の語例（それぞれ「地肹（「地を」中世語stah-ɨr」「花肹（「花を」中世語koc-ɨr）」「「これを」中世語i-(rʌ)ｒ）」：同書同ページ）などがみられることから「Vovin（1995）も指摘するように,hɨrの字音から推定されるような,語幹末のhの音を表すためのものであったとみなすのは確かに困難である」（同書同ページ）とみられ、「乙」と「肹」（古い用法とみられています）との違いは不明とされています。ところで「乙」（ʔɪĕt）と「肹」（hɪĕt）はともに中古音喉音入声質韻３等で全清音影母（ʔ）と清音暁母（h）との違いです。そこで朝鮮漢字音の「乙」（ʔɨr）と「肹」（hɨr）の違いをhの有無とはみないで、そのかわりに合字解の「初声のㆆはㅇと似かよっており、朝鮮語においては通用させることができる」（趙　2010：100）という記述から‘はっきりした声立て’（ㆆ）と‘ゆるやかな声立て’（ㅇ） の違いと考えます。たとえば「hanʌrh「天」の主格形はhanʌrh-iともhanʌr-iとも表記されており、中世語における状態は変化の途上にあったことを示している」（福井　2013：185）という記述はhanʌr***k***ʔi→hanʌrʔi→hanʌr’iの変化とみることができ、「乙」と「肹」の用法に混乱（混同）がみられるのは「肹」が、「乙」への変化の途上にあったため（***k***ʔɨｒ（「肹」）→ʔɨｒ（「乙」）→’ɨｒ→ɨｒ（のち合成母音化））と考えることができるでしょう。
11. 郷歌「献花歌」に「花肹折叱可」（「花を折りて」）の「叱」を小倉氏は「ᄭᅥᆨ거兩字の間に起る促音現象を表はすに「叱」を用ひたのである。而して次なるはᄭᅥᆨ거の거を表記したものである」（小倉昭和49：162－3）と考えられました。これはᄭᅥᆨ（「折」）の末尾音-kと거（「可」）の初頭音k-の続きの音相が日本語の促音に似ているとみて「折」と「可」の間に「叱」があるとみられたようです。しかし小倉氏の-k+「叱」+kの解釈を認めたとしても「叱」の実体はよくわかりません。金完鎭の翻字は「것거（kes ke）」（金完鎭　1980：68　꺾다（「折る」））なので「kes（折・叱）+ke（可）」（現代訳は꺾어）のような解釈なのでしょう。
12. 原載は橋本・兪　1973－6：10。この論文には上古音に複声母Clを再構し、Cl→l/s（lの朝鮮漢字音はr）の変化を考えるアイディアがみられ、「尸」と「叱」を関係づけようとする努力がみられます。小倉によれば「叱」は一般に「持格」（属格「〜の」）や促音と解釈されているのですが、そのほかにも目的格（을・ᄋᆞᆯ）の「乙」やㄹとも同一視されています（小倉　昭和49:243）。兜率歌の「直等隠心音矣命叱使以惡只」の「命叱」は「直き心の命を使して」（小倉　昭和49：208）のように「命을」とみたり、「命ㅅ」と翻字して「命에」（「命を」：金完鎭1980：123）と解釈されたりするのですが、この「命叱」の「叱」を文法的な属格（〜の）とみることはできず、「命叱」の「叱」を「命尸」の「尸」と同等とみるのが自然でしょう。またその反対に「尸」が「叱」とみられる例が彗星歌の「東尸汀叱」にあります。小倉氏が「東尸」の割注に「東ㅅ」（筆者注：原文の右）と「東方の」（筆者注：原文の左）とされ、「東尸汀叱」を「東方の水際なる」（小倉　昭和49：215）と解釈されたのは「東尸」に「東叱」をみられたのでしょう。金完鎭氏が「東尸」（翻字：ᄉᆡᆯㄹ）の「尸」を末音添記字とみて、「東쪽」（「東方」の意」）と現代語訳（金完鎭　1980：128,137）されたのは「東尸」の「尸」に「叱」をみられなかったためでしょう。小倉は「何故に「叱」を을に代用したかといふに、そは單に「叱」の末音にㄹの存するに原因する」（小倉　昭和49：75）とされたのは「叱」が「広韻昌栗切，中世語cɨr」（福井　2013：182、中古音歯音3等昌母質韻ɪĕt）であることから語末にrをみて、そこから末音添記字の「叱」を考えられたのでしょうか。このように「尸」は「叱」に、「叱」は「尸」に解釈できることから「尸」→「叱」の変化を考えるのがよいでしょう。
13. 語間の全清字は『訓民正音』（諺解本）だけではなく『龍飛御天歌』や『釋譜詳節』『月印釋譜』などにも見られます。いくつかあげておきます（小倉　昭和49：46、福井　2013：68）。
「平生ㄱ(o)ᄠᅳᆮ（素志）〔龍飛御天歌〕」

「王—k 姓-’ira　　　「王の姓である」　　（釋譜9：19b）

故—q 字　　　　　　「故の字」　　　　　　（月釋序24a）」

1. 「須須」と鳴いた雀はいま-サ行音の問題を解決する　その１」（http://ichhan.sakura.ne.jp/saline/saline1.html）
「쥐：cwi[tʃɥi]「ネズミ」」（福井　2013：86)も同じように「鼠」の擬声語とみられ、Siuɴと同音とみることが可能でしょう。
2. 与那国方言の語頭には「[t‘a]（「田」）―無声有気音(tha)/[da]　（「家」）―有声音(da)/[ta]　（「舌」）―無声無気音(tʔa)」のような3項対立がみられます（橋本萬太郎　1981：346）。

＊「琉球方言にみられる無気喉頭化音について」（http://ichhan.sakura.ne.jp/kaline/kaline2.html）

1. 岩倉氏の観察は記憶に値するものです。なかなか目にする機会がないのでここに引用しておきます。
「「カ」行音　〔e〕〔o〕から轉來の〔i〕〔u〕を伴ふ〔k〕卽ち國語の「ケ」「コ」から轉じた「キ」「ク」の子音は有氣音に發音されるが、本來の〔i〕〔u〕を伴ふ「キ」「ク」の子音〔k〕は無氣音化して「」「」となり、兩者ははつきり區別される。例へば「コチ」（東風）は「クチ」、「ケン」（劍）は「キン」と發音されるが、「クチ」（口）は「チ」、「ン」（金）は「キン」と發音される等である。（改行）本來の〔i〕を伴ふ無氣音の「」、例へば右（注：上）の例に於ける「ン」（金）の「」は、更に轉じて「」になる場合が多い。「菊」が「ク」に、「鋤」が「ス」になる等である」（岩倉　昭和16:(2)）。また伊波（1974:26-30）にも同様の記述があります。
2. 「上代のカ行音は有気音だったのか？-日本書紀歌謡α群中国人述作説から考える」（<http://ichhan.sakura.ne.jp/kaline/kaline1.html>）
「上代コの音はhoだったのか？－日本書紀歌謡の喉音字の問題を考える」（<http://ichhan.sakura.ne.jp/kaline/kaline2.html>）
3. 上声の起源を解くうえで参考になるアイディアが「カンボジア語のrとのぼり音調の関係について」（橋本萬太郎　1981：243－4）にあります。
4. ガ行の語中は「現在大まかには中国地方から西は[g]、近畿から東は[ŋ]の地帯といえる。京都では既に[g]に座をうばわれそうな勢いである。この他、高知・紀伊・新潟などのように、[g]の前に軽い鼻音が伴なう[〜g]（[〜g] [ŋg]両様）が残る（以下略）」（秋永　1990新装版：102）。このガ行の語中鼻音はガ行鼻濁音と呼ばれ、中世の宣教師「ロドリゲスもD、Dz・Gの前の母音が鼻音を伴っていることを注意し、次の例を上げている。（改行）　Māda（未だ）　nído（二度）　mādzu（先づ）　águru（上ぐる）　fanafáda（甚だ）　fágama（羽釜）」（同書：103）。
ガ行鼻濁音：http://ichhan.sakura.ne.jp/tida/tida3.html#gagyou\_bidakuon

【引用書】
＊中国・韓国の人名は日本語読み。

秋永一枝　1990(新装版) 　「発音の移り変り」『日本語講座(第６巻） 日本語の歴史』　阪倉篤義編　大修館書店

有坂秀世　昭和32　『国語音韻史の研究　増補新版』　三省堂

伊藤英人　2012　「古代・前期中世朝鮮語における名詞化」『東京外国語大学論集』（85号）（同大学DBより）

伊波普猷　1974　『伊波普猷全集　第四巻』　平凡社

岩倉市郎　昭和16　『喜界島方言集』（全国方言集一）　柳田國男編　中央公論社

牛島徳次・香坂順一・藤堂明保　昭和42　『中国文化叢書　１　言語』　大修館書店
大友ほか　1991　『外国資料による日本語研究：大友信一博士還暦記念』　大友信一博士還暦記念論文集刊行会編　和泉書院

小倉進平　昭和49　『小倉進平博士著作集（一）』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學会　＊郷歌及び吏讀の研究(京城帝国大学法文学部紀要第1 京城帝国大学昭和4年刊)の複製

小倉進平　昭和50　『小倉進平博士著作集（三）』　京都大學文學部國語學國文學研究室編　京都大學國文學会　＊国語及朝鮮語發音概説　南部朝鮮の方言他

尾崎雄二郎　昭和55　『中國語音韻史の研究』（東洋学叢書）　創文社

亀井孝　昭和59　『亀井孝論文集（３） 日本語のすがたとこころ（一）音韻』吉川弘文館

亀井ほか　1989　『言語学大辞典　2巻（世界言語編　中　さ〜に）』亀井孝・河野六郎・千野栄一編　三省堂

姜信沆　1993　『ハングルの成立と歴史』（日本語版協力：梅田博之）　大修館書店

京都大學國文學會編　昭和33　『倭語類解』　京都大學國文學會

金完鎭　1980　『鄕歌解讀法研究』（韓國文化研究叢書21）　서울大學校出版部

金東昭　2003　『韓国語変遷史』　栗田英二訳　明石書店

玄平孝　1962　『濟州島方言研究　第一輯　資料篇』　精研社

小泉保訳　1982新版　『新版　音声学』　Ｍ．シュービゲル著　大修館書店

国立国語研究所編　昭和51　『沖繩語辞典』（国立国語研究所資料集5）大蔵省印刷局発行

上代語辞典編修委員会編　1967　『時代別国語大辞典　上代編』三省堂

趙義成訳注　2010　『訓民正音』（東洋文庫）　平凡社

天理大学朝鮮学科研究室編　昭和55　『改定版　現代朝鮮語辞典』　養徳社

土井ほか　1980　『邦訳日葡辞書』　土井忠生・森田武・長南実編訳　岩波書店

東條操編　昭和44　『南東方言資料』　刀江書院

藤堂明保　昭和42　「1　上古漢語の音韻」『中国文化叢書　１　言語』　大修館書店

藤堂明保　1980　『中国語音韻論－その歴史的研究－』　光生館　＊江南書院昭和32年刊の改版

外山映次　昭和47　「第三章　近代の音韻」『講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

仲宗根政善先生古稀記念論集刊行委員会編　1982　『琉球の言語と文化』　同論集刊行委員会(発行)

中田祝夫　昭和47　「第一章　総説　講座国語史　第2巻　音韻史・文字史』　中田祝夫編　大修館書店

中松竹雄　昭和62　『琉球方言辞典』　那覇出版社

布引敏夫　1984.6「『陰徳記』の日朝会話集について―文禄・慶長の役における日本軍の暴虐」『山口県地方史研究』（51号）　山口県地方史学会編・発行　＊『陰徳記』（巻七六）所載の「高麗詞之事」

橋本萬太郎　1981　『現代博言学』　大修館書店

服部四郎　1951　『音聲学』（岩波全書）　岩波書店

服部四郎　昭和34　『日本語の系統』　岩波書店

濱田敦　昭和45　『朝鮮資料による日本語研究』　岩波書店

平弥悠紀　1991　「日本語に於ける有気音と無気音―室町時代以後の中国資料による―」『外国資料による日本語研究：大友信一博士還暦記念』　同刊行会編　和泉書院

平山久雄　昭和42　「3　中古漢語の音韻」　『中国文化叢書　１　言語』　大修館書店

福井玲　2013　『韓国語音韻史の探究』　三省堂

古屋昭弘　2010.11　「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」『中国語学』（第257号抜刷）　中国語学研究会（日本中国語学会）

前間恭作　昭和49　「龍歌故語箋　疎雞林類事麗言攷」『前間恭作　著作集（下）』　京都大学文学部國語學國文學研究室編　京都大学國語學國文學會
宮良當壯　昭56　『宮良當壯全集　８ 八重山語彙乙篇』　第一書房

森博達　1991　『古代の音韻と日本書紀の成立』　大修館書店

李基文　1975　『韓国語の歴史』　藤本幸夫訳　大修館書店

Hashimoto,Mantaro J.and Yu,Chang-Kyun（橋本萬太郎・兪昌均）　　1973.9　Archaism in the Hyang-Tshal Transcription The sound values of the character 尸　and their origin　『アジア・アフリカ言語文化研究』（6号）　東京外国語大学A.A研